

---

# キズナ！

やっこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キズナ！

### 【Nコード】

N8837E

### 【作者名】

やつこ

### 【あらすじ】

借金取りに追われる日々を過ごす貧乏少年、秋坂才悟あきさかさいごが、超大金持ちの家の養子に！？それまでとかけ離れた生活と個性豊かな人との面々に囲まれて戸惑いつつも、学園生活を中心にさまざまな人とのキズナを深めていく才悟の学園ラブコメディ！ドジで天然なメイドやツンデレな義妹とかも登場するよ！

## 第1話：世界の中心で理不尽を嘆く（前書き）

この物語は、作者が完全なる暇つぶしで書いた文章で成り立つ不定期更新のラブコメです。過度な期待はしないでください。あと、小説を見るときは画面から30cmは離れて見やがってください。

## 第1話：世界の中心で理不尽を嘆く

俺は住宅街を疾走していた。

今100m走の記録をとればすばらしい結果が出せると思う。その代わり、止まった瞬間に過剰な激務でぶっ倒れると思うけどな！

さて、なんで俺がそこまで必死に走っているのかということだが、

『逃げないでくださいよー！ 取って食べようってわけじゃないですからー！』

可愛らしい少女の声に遅れて、ガトリングガンによって放たれた銃弾が俺に殺到する。

「ふざけるおバカッ！！ そんなぶっそうなもんぶっ放しながら言っても説得力の欠片もねえよっ！！」

『しょ、しょうがないじゃないですかー！ このへりに足止めに使えそうな武装はこれしかついてないんですからー！ 大丈夫、威嚇射撃ですから絶対に当てませんよー！』

「信用できるかボケエエエエエエエエエエエッ！！」

つまりは、こういうことです。

どういつわけか、ただいま俺はメイドさんの乗るへりこぷたーに追われている最中です。

嗚呼、どこへ行ってしまったというのか我が平穩！

とりあえず、俺はどうしてこんなことになったのかを再確認するためにほんの少し前の出来事を思い出すことにした……。

唐突ですがみなさん。

家まで帰ってきたら、黒いスーツ着たおっさん達がたむろしていました。

「は？」

俺の思考は一瞬でフリーズ。ちょうど隣に電柱があったので、そいつに頭をぶつけてみた。痛かった。気絶するかと思った。ついで

にいうと、通りがかりの親子の視線が痛かった。こら、指を指すんじゃないよ坊主。

とりあえず、くるりと反転してすったかすったか。曲がり角を曲がると、一呼吸置いた。

……え？ あれ何？ 何かのドッキリ？

徐々に解凍されてきた思考がパニックに陥りかける。待て、とりあえず落ち着け俺。状況整理してみよう。

今、俺はいつも通り まあ、明日から春休みだから多少浮かれているが 放課後を迎えて家へ帰るところだ。うん、それはいいで、ちょうど家から50mぐらい離れた曲がり角をさっき曲がったんだ。そしたら俺の家を囲むように黒スーツが徘徊していた。

はい、まったく理解できません。

「うおおおおおなんだこの状況おおおおおおっ！」

マジで意味分かん。何故に俺ん家に黒スーツ集団？ もしや借金取り？ ついに痺れを切らした奴らが家を差し押さえに来たのか！？ だから金借りるのもほどほどにしとけて言っただじゃねえかクソ親父！！

……いやね？ 実を言つとこつという状況には慣れてるんです。俺ん家すげえ貧乏だから。親の負債を俺がバイトして返してるぐらいだから。だからヤクザさんの取立てなんて家じゃ日常茶飯事なんです。

でもあの連中はどうかやらしい堅気で『ない』商売をしている人達とは違う気がする。なんていうか、着てるスーツも高そうだし、むやみやたらと威圧してる風でもないし、なによりわざわざ借金の取立てであれだけの人数は動員しないだろう。

だが、彼らとヤクザとでは一つだけ共通している部分がある。幾度となく死線（借金の取立てから逃げること）を経験している俺には分かる。連中の懐に拳銃<sup>チャカ</sup>が収められていることが。

「つーか、あいつらなんで俺ん家囲んでんの？」

おかしい。金を借りることはあれど、人様に迷惑をかけるようなことをした覚えはないのだが。……はっ！ まさかつ、これがテレビでも騒がれている『テロ』という奴なのか！？ ということは、標的はあの家の主である俺！？

俺、顔面蒼白。

と、とにかく！ このままじっとしているのはすげえ危険っぽい！ 何か、何かアクションを起こさなければ！

しかし、俺は一体どうすれば

1・たたかう

2・まほう

3・わざ

4 ・とっとう

ちよつと待て！？　なんで戦う選択肢しかないの！？　つつか最後の選択肢は暗に俺に死ねと！？

……ふう、不条理な選択にツツコムことで冷静さを取り戻したぜ。さすが俺、もつともハリセンが似合う男と評されただけのことはあるぜ。ぜんぜん嬉しくないけどな！

さて、冷静さも取り戻したことだし、今度はまともな選択肢が出てくれることだろう。よし、一体俺は何をしよう！？

1 ・警察に連絡

2 ・とんずら

3 ・小宇宙を燃やす

4 ・あたたたたたたたたたたたたたたつ！

うん、まともな選択肢は最初の2択だけだな。ちなみに、『小宇宙』は俺の脳内で速攻力タカナに変換された。言わずともみんな分かるよね？



まあ、とにかくここは無難に”1”だろう。さっそく俺は携帯を取り出す。

……しまった。そういえば今日は携帯を持っていくのを忘れてた。つまり、携帯はあの無敵の包囲陣の向こうだ。近くに公衆電話もないし、コールは無理っぽい。

なら、ここで選ぶのはもうひとつしかないだろう。

「む、貴様は！」

接近した俺に黒スーツ達が気づいた。一瞬でチャカを引き抜く。スゲー怖い。ヤクザを見慣れた俺でもちびりそうだった。

俺はその恐怖を押さえ込むために一度深呼吸すると、地の底から響くような唸り声を上げながら両腕で軌跡を描いていく。

「な、これは！？」

「あのガキの周りに小宇宙が見えるっ」

「しかもあの軌跡は……！」

ようやく気づいたか。だが遅い！

「ペガ ス流星拳！」

音速の拳が黒スーツを捉える！

「どうだ……！？」

「ふっ……」

なっ……まさか、俺の必殺技が効かないだと……！？

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア！！」

いっせいに向けられた拳銃が俺の体に向けられ発砲される！

次の瞬間には俺の意識は完全に途切れていた……。

DEAD END

「はっ」

いかん、おもしろそうな選択肢だったからつい妄想してたら殺されてしまった。我ながらリアリティのある妄想だったぜ……。

さてと。気を取り直して、もちろん選ぶ選択肢は

……

……

…

てへ

「あたたたたたたたたたたたっ！」

3秒間に50発の拳が正確に敵の秘孔を突く！

「お前は既に、死んでいる！」

パンツ

俺は既に殺されていた……。

DEAD END

「うおっ、あまりのリアルさにマジで小便ちびりかけたぞ」

想像力がたくましすぎるのも問題だな。さて、気を取り直して今度こそ

1・控えたまえ、君はラ ユタ王の前にいるのだよ

2・はりやほれうまうー

3・絶望したッ！ 何回やってもDEAD ENDになることに絶望したッ！

「もうええっちゅうねん」

自分の頭に関西弁でツツコム。俺の頭に潜む陽気な悪魔は舌を出して「てへっ」と笑った後消え去った。きもい。

「くそ、あまりの非現実ぶりに頭がショートしてやがる」

本当に今度こそ、俺は頭を切り替える。大丈夫、奴らはまだ俺に

気づいていない。ここは角だから奴らからは死角だし、こつそり反転すれば問題ない。ふふふ、俺の（借金取りによって）鍛え上げられた俊足<sup>にげあし</sup>に付いてこれるかな？

……それにしても、さつきからなんかうるさいな。この音からするとヘリだろうか。低空飛行しているのか、思いのほか近くから聞こえてくる。

ていうか、真上にいた。

「うおっ！」

プロペラが巻き起こす強風に見舞われて俺は思わずのけぞる。ちよ、ここ市街地だぞ！？　こんなとこでそんな超低空飛行が許されていいのか！？

「あっ」

のけぞった拍子にポケットに入っていたものが飛び出した。500円玉だ。ついでに言うと、これが今週いっぱいのお食事代である。

ちやぽん

風に吹かれた硬貨は下水へと落ちて流されていった……。

ぶちんっ！

たつた今、俺の最後のリミッターが外された。

「おんどりやあ ああああああつ！！ 俺の飯代返しやがれ  
えええええええええええつ！！」

俺は身近にあるものを問答無用で投げつける。手始めに石。命中。

カン

そいつは鼻で笑うがのごとく石を弾きやがった。

「殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺ツ！！」

何かに取り付かれたかのように俺は手当たり次第に物を投げつける。うふ、うふふ、うふふふふふふふ！

あつ

と、俺は自らがぶん投げた物体を視界に入れて血走った目が正常に戻った。

あれは、俺の財布だ。俺の全財産だ。俺の命だ。

それは今までにない綺麗な曲線を描くと、狙い済ましたかのように高速回転するプロペラへとダイブした。

ブオオオオオオオオオオ！

斤車斤車斤車斤車斤車斤車！

「諭吉 いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいつ! !」

終わった。何もかも。つい、どこからどう見ても完全なる自爆だった。

「あうーっ。物を投げないでくださいよっ。これは借り物なんですから、傷なんてつけちゃったら怒られちゃいますー！」

と、この世の終わりみたいな顔で地面に膝をつく俺の耳に、拡声器越しの女の子の声が届いた。俺は生気の欠けた瞳で、へりから飛んできたらしい声の跡を辿って視線を向けた。

「つてメイドかよ!？」

渾身のツツコミによつて生きる力を取り戻した俺。俺の言葉通り、拡声器を持つてこつちに声を届けた主は誰がどう見ても分かるメイド服を着用した女の子だった。

俺、しばらく呆然。あまりにもツツコミ所が多すぎて一度にすべてをツツコミ切れない。

「えーと。あの、はじめまして。あなたが秋坂才悟様ですよね？」

とりあえず俺は頷く。

「はあ、よかったあ。もし無関係の人だったりしたら、一生ぶんの恥をかくところでした。えつとですね、いろいろと言いたいことはあると思うんですけど、とりあえず身柄を確保させてくださいね」

「は？」

呆けた声を出す。身柄の確保って、何を言っとるんだこい、つ……は……。

気づいたら、黒スーツの男達に囲まれてました。

くっ！ 最初にどこをツツコムか悩んでいたから気配に気づけなかった！

『ご心配なくー。暴れさえしなければその人達は決して危害を加えたりしませんから』

「じよ、冗談じゃねえ！ こんな得体の知れない連中に捕まってたまるかよっ！」

俺は懷に隠し持っていた爆竹を地面にぶちまけて連中がひるんでいる隙に逃走した。爆竹はいざというとき（つまりは極道の人に絡まれたとき）逃げ延びられるようにいつも持っている。少ないお金を削ってまで買っておいでよかつたぜ。

『あつ！ ま、待ってくださいよーっ！』

慌てて追いかけてくるメイドを乗せたヘリと、黒スーツ集団……ここは本当に日本か？

「ちくしょーっ！ なんだって俺がこんな目にーっ！」



で、今もなお俺は追われ続けていると。

今の状況が有り得ないぐらい理不尽であることが再確認できただけだったな、今の回想。

「納得できねーっ！」

俺は魂の絶叫を響かせながら街を走る。ここは俺が生まれ育った街だ。強面のおちゃん達との鬼ごっここの場も大半がここなので、俺はあらゆる逃走ルートを熟知している。だがいかんせん、相手は空からも追いかけてくるのでなかなか追跡を振り切れない。かれこれ三十分ぐらいは走り続けたんじゃないか？

「ぜえ…ぜえ……も、ダメ……」

俺の体力タンクはとくに空っぽだった。今は気合で足を動かしているに過ぎない。ただでさえ最近ろくなもん食ってないのに、こんな限界ギリギリの運動してたらマジでぶっ倒れるわ。

え？ 助けを呼べばいいじゃないかって？

呼びましたよ。ええ、近くの交番にそっこで駆け込みましたよ。

おまわりさん、威嚇射撃にビビッて退散しましたよ。俺を置いて今日ほど日本警察が頼りないと思ったことはなかったですよ。

しかも本部からの増援が来るわけでもないっぽい。パトカーのサイレン聞こえないし。すれ違う人は助けを求める視線を送ると目をそらすし。あげくの果てに安全圏から写メ取られてるし。よい子のみんなはそんな真似しないようにね！　こんな状況一生かかっても遭遇しないと思うけどな！

「ダ、ダメ……マジダメ……ちょっと、休憩……」

俺は建物の影に身を潜めた。ここなら空からでも死角になって場所は分からないだろう。逃げ延びたわけじゃないけど、ここならしばらくは安全だ。ここで体力回復に努めよう。

「あ、あれ？　才悟様？　秋坂才悟様ー？　どこに行っちゃったんですかー！？」

案の定、あのメイドは俺を見失ったらしく狼狽した声で『ようどうしよう……！』と連呼している。ちよつと可哀想な気もするが、こっちもかなり必死なので冷徹にならせてもらう。

『あうー。こ、困りました……。もしこのまま才悟様を連れて行けなかったら旦那様になんとお詫びしていいやら……。え？　なんですかママさん？　旦那様から渡された資料を見ていい事を思いついた？　これならなんとかなるかもしれない？　ほ、ホントですかママさん！　ど、どうするんですかっ！？』

おそらく、あのへりを操縦しているのもあろうヤマさんとやらの助言に耳を貸すメイドさん。ていうか、作戦会議するなら拡声器切れよ。

『……えつと、そんな馬鹿みたいに単純な方法で大丈夫なんですよか？ うう、でも他にいい案もないし……ええいままよ！』

作戦会議は終わったらしい。ふつ、一体何を思いついたのかは知らんが、完全に気配も殺した俺を見つけるなど不可能なのだよ。俺を見つけたきや熱源探知機でも持つてくるんだな！

チャリン

ピクッ

「い、この音は……！」

聞こえた。微かだが確かに聞こえた。この俺が、あの音を見逃すはずがない。

チャリンチャリン

ピクピクッ

きらーん、と俺の目が光る。

「そこかーっ！」

俺は影から飛び出すと、さっきまで疲労困憊だったとは思えない速度で通りに出た。

そこには、俺が求めて止まないお金が落ちていた。

「アイ・ラブ・マネエEEEEEEEEEEEEEEEEツッ!!」

俺は獣のごとく硬貨に飛びついた！

ガシャン

「……は？」

気づいたら、俺は檻の中に閉じ込められていた。

頭上には、呆然と俺を見るメイドとへり。

『……まさかホントに引つかかるとは思わなかったです……』

「しまったああああああああああっ!!」

この瞬間、俺のオツムレベルはそこら辺の野鳥と並ぶこととなった……。

結論から言うと、俺は檻に入れられたままへりに吊るされて御用となった。

街中のみんなから笑われましたよ、ええ。

……ぐすん。べ、べつに悲しくなんかないんだからねっ。

連れて来られたのはどう足掻いても一生縁のないはずだった超豪邸だった。そう、『超』だ。こんなでかい屋敷、漫画の中でしか見たことねえよ……。

俺はその屋敷のこれまた広い庭に下ろされると、思いのほか丁重

に屋敷へと招きいれられた。中も当然のごとく豪華で、あまりの輝かしさに気絶しそうなのを堪えながら連れられていく。

んで、連れて来られた一室で俺はダンディなおじ様と対峙するハメとなった。

「やあ、はじめましてだね、秋坂才悟くん」

「はあ、どもです」

俺は心底緊張しきった調子でなんとか言葉を返す。こないかにも高そうなものばかり置いてある部屋なんかに連れてこられたら俺みたいな貧乏人は萎縮するしかない。うう、胃が痛い……。

「ははは、やはり緊張しているかな」

「は、はあ……」

「と、まずは自己紹介しようか。私は朝霧<sup>あさぎり</sup>厳重朗<sup>げんじゅうろう</sup>。それなりに有名なと思うのだが、聞いたことはないかな」

「あ、朝霧<sup>あさぎり</sup>厳重朗<sup>げんじゅうろう</sup>……！？」

ちょっと待て！ 朝霧<sup>あさぎり</sup>厳重朗<sup>げんじゅうろう</sup>って言えば、世界でも有数の経済力を誇るっていう朝霧グループの現社長じゃないか！ 通りでどっかで見た顔だと思った……。

目の前の人がそんな超ビッグな人であることが分かってますます小さくなる俺。

「そ、そんな人が、なんで俺なんかをさらって……」

「さう？ …… ああ、すまない。べつに君をどうしようとして使いを送ったわけじゃないんだ。彼女はメイドとして優秀なんだが、時々暴走気味になってしまうのが欠点だね。許してやってくれると助かる」

ぶんぶんと俺は頷く。命がけで逃げていた俺としてはツツコミたいことこの上ないが、こんな大物相手にツツコミができるほど俺は肝が据わっていないかった。

「まあ、その私が君に足を運ばせた件についてなんだがね。いきなりなんだが、才悟くん、今から私が言うことを真剣に聞いて欲しい」

「ゴクツ……は、はい……」

「実はだね」

朝霧さんはそこで一息置くと、とても真面目な顔で、言った。

「今日から君はこの養子となった。よろしく、マイサン」

「いきなり過ぎだバカ」

こうして、俺の波乱万丈な日常が始まった……。



## 第1話：世界の中心で理不尽を嘆く（後書き）

ああ、ついにやっちゃったよ……無謀なる二作平行進行……。前もこれやって挫折したのに……。

というわけで、前書きにも書いた通り、この小説は作者が気が向いたときに”だけ”書くという不安要素ばりばりのお話です。無期更新停止とかも有り得ます。まあそれなりにがんばりますが、みなさんも暇つぶし目的でこれを見てください。

あと、これを見ておもしろいと思った方がいたら「ソウルマスター KAZUKI」の方も見ていただけたら大変うれしいです。感想お待ちしてまーす。

第2話：シンデレの妹に憎まれて眠れないお話 前編（前書き）

なんか才悟のキャラがソウルマスターの主人公と少し被ってる気が……ま、いっか（笑）

## 第2話：ツンデレの妹に憎まれて眠れないお話 前編

拝啓、オフクロ様。

そろそろ本格的に春の息吹を感じさせてきたこの時期、いかがお過ごしでしょうか。ワタクシは元気に過ごしています。あなた様やオヤジ様の残した借金で極道の人に脅されながらも、オホーツク海で力二採りをすることも臓器を売ることもなく生きてますよ、ええ。自分でもゴキブリの如き生命力に驚いております。

そんなワタクシですが、実は今とても困ったことになっています。どれぐらい困っているかと言うと、あなた方が残した負債額の桁数に絶望し途方にくれた時ぐらいにです。……いやほんと。あの時は自殺でもしようかと思いました。マジで。

ところでオフクロ様、朝霧グループというのをご存知ですか？ええ、そうです。「金持ちだから勝ち組なんて嘘っぱちだ」とちよくちよく負け惜しみをほざいていたあのオヤジ様が忌み嫌う、いわゆるお金持ちです。ワタクシは何故か、そのお家の養子として迎えられました。

あ、今殺気放ちましたね？ブルツと来ましたよ。声も聞こえます。「何あんた？ あたしら裏切って自分だけ裕福に暮らそうって？ ひ孫の代まで祟るぞ？」

……まあ、そう思いますよね。でもですねオフクロ様、それは間違いです。これ、ぜんっぜん羨むことなんかじゃないです。

むしろ誰か代われ。

その理由については……まあ、話が進めばいずれオフクロ様達にも分かる日が来るでしょう。

それでは、今日もワタクシ秋坂才悟は往きます。磨きぬかれた逃げ足と、刃の如く鋭いツツコミを武器にして　　。

……え？　なんか才チないの？

窓から差し込む光で目が覚めた。

「ん……む……もう朝か……」

俺はのそのそと体を起こす。あー、なんかすげえ平和な夢見たな！。牛乳配達して学校行つて勉強して夕方のバイトしてチャ力持ったおっちゃんに追つかけられて……っていつもの日常じゃん。

自分の夢にツッコミを入れてあくびを一つかまし、寝ぼけた頭で考える。えっと……もう春休みも一週間過ぎたんだよな……。今日も学校は休み……ああでも牛乳配達に行かなきゃ……今月も大赤字だし……とりあえず朝飯作るか……。

そこまで考えて、自分がいる場所が俺の家でないことに気づいた。

「……………あ」

そして思い知らされる、現在の俺の立場。

さらに、その立場を裏付ける、このだだっ広い部屋。

……うん、夢だ。今こうしてここにいることは夢なんだ。ははは、そうに違いない。そう思わせる。え？ 一週間も経ったんだからいい加減慣れるって？ ならデメエ一回代わって見やがれ。

「つてなわけで、お休み」

俺は考えることを放棄してもう一度寝る体制に入る。うお、スゲエふかふか。すやすや。

「おはようございます才悟さん。今朝もいいお天気ですよー」

……うん、これは幻聴だ。こんなメイドさんの声、俺は聞いたこ

ともない。そもそも俺の家にメイドさんなんかいるわけない。そんなの雇う金なんてどこにもないからな！

「あれ？ まだ寝てらっしゃるんですか？ ふふ、意外と寝ぼすけさんですね。ほらほら、起きてください。そろそろ朝食の時間ですよ」

……うん、この体を揺すられる感覚も夢だ。女の子に、しかもメイドさんに起こされるなんて、そんなシチュエーションが俺に訪れるわけがない。自分で言ってる悲しいけどな！

「あー。なかなか起きませんね、どうしよう……。あ、麗菜様？」

なにい！？ 麗菜だとう！？

「珍しいですね麗菜様、こんなに朝早く起床なさるなんて……ってなんですかそれ！？」

「真奈美！ そこ退いて！」

どりゃああああああ！ と乙女らしからぬ気合の籠った声と共に放たれる殺気！ 俺は脊髄反射でシーツを跳ね除けベッドから飛びのいた。

ドゴン！ とぶざけた音。

……あの、俺にはさっきまで寝てたベッドがデカイハンマーで粉砕されているように見えるんですけど。ついでに言うとハンマーに『10t』とか書かれてるんですけど。

「デメエ俺を殺す気か！？」

当然のことながら講義する俺に対して、その細い腕のどこにそんな力があるのか不思議でならない少女・麗菜は、チツと舌打ちなんぞしやがった。こいつホントにご令嬢か？

「何避けてるのよ秋坂才悟！ おとなしく私の肅清を受けなさいよ！」

「ふざけるおバカ！ そんなもん受けたらマジで死ぬわ！」

「当然。だって殺す気だもの」

やべえよこの女。目がマジだよマジ。

「私ね、前から思ってたの。人の体ってどのくらいの衝撃まで耐えられるのかって。だって、ちゃんと限度を知っていないと痛めすぎで壊しちゃうものね。ふふ」

しかもDSですよこの人。

「うう、妹がこんな殺人鬼で攻め好きなんで、お兄ちゃん悲しいよ」

「だ、だだだだだ、誰が妹ですってええええええええええええええええっ！？」

「ひいひい！」

10tハンマーをぶんぶん振り回す麗菜から逃げ回る俺。だって10tだよ！？ ベッド粉碎だよ！？ なら逃げるしかないじゃない

いかっ！

「そこまでです」

と、突然颯爽と現れた影が俺に迫るハンマーを軽々と受け止めた。

「お嬢様……仮にもあなたは朝霧家の娘なのですから、もっと慎みのある行動をしてください……」

「し、修司<sup>しゅうじ</sup>さん！」

遅いよ修司さん！ でも助かったよ！ 凶暴化した麗菜を鎮圧できるのはあなたしかない！

「退いて修司！ 私は朝霧家時期当主としてそいつを殺さなきゃいけないの！」

「お嬢様。いい加減になさらないと、旦那様に言いつけますよ？」

「うっ」

氣勢をそがれる麗菜。こいつ、こんな性格だけどファザコンだからなあ。

いつもならそれで決着がつくのだが、今日の麗菜はまだ威勢を失っていないかった。

「そう言えば修司。三日ほど前から私の下着が一つ見つからないのだけ」



「は？ そのようなことは伺っていませんが」

「その下着、あなたに盗まれたってお父様に言っわよ」

こいつ、悪女だ！

「なっ！ そ、そんな世迷言が通じるわけが！」

ない、とはいいい切れない修司さんだった。あの人も麗菜には甘いからな。

「ふふ、そうだったら、あなた明日から路頭に迷う羽目になるわね。うっん、もしかしたら社会的にも生物的にも抹殺されるかも……」

まずい！ このままでは修司さんが屈してしまう！ なんとか修司さんを援護しないと！

1 ・正面から突っ込む

2 ・不思議な踊りをする（速攻で吹っ飛ばされる可能性あり）

3 ・弱点を突く

もちろん『3』に決まってるっ！

「おい、麗菜！」

「あによ」

「テムエのつるぺた魅力がなさ過ぎんだよゴラアアアアアアアアアアアア」

「  
ツツツ!!!!」

あ、やばい。

直後、手加減抜きで振りぬかれたハンマーが俺の体を吹っ飛ばした。

「才悟さん……さすがに今のは才悟さんが悪いかと……」

うう。ちくしょー。なんで俺がこんな目にあわないといけないんだーっ。

俺はさめざめと泣きながら、ほんの一週間前のことを思い出していた……。

「才悟くん。君にはこの朝霧家の養子となってもらいたい」

厳重朗さんの言うことを要約すればこうだ。

厳重朗さんと俺の両親は実は学生時代からの親友らしい。そう言えど昔親父がテレビに出ていた厳重朗さんを指差して「こいつ俺の親友なんだよ」とかほざいてた。てっきり冗談かと思ってたんだけどな。

学園を卒業してからその関係は続いていたらしく、たまに会ったりしていたそう。で、その折に親父が「もし俺達に何かあった場合、息子を頼む」ともらっていたそう。まあ、ヤクザに追い立てられる日々だったからな。一応保険として頼んだんだろうな。で、今回その保険が働いたわけだ。

「二人のことは私の耳にも届いている。交通事故、だったかな？」

俺の両親は先日車の運転中、大型トラックに衝突して亡くなった。祖父母は既に他界しており、親戚もいないため、俺は一夜にして天涯孤独の身となった。で、そんな俺のために厳重朗さんは俺をこの家の養子にして住まわせてあげようと言っている訳だ。

「その話、断ってもいいですか？」

俺はきっぱりと言った。

「親父達の気遣いは嬉しいし、厳重朗さんが心配してくれてるのも分かってるんですけど、俺なら一人でも大丈夫です。親父達はしょ

つちゅう家を空けてたから死ぬ前も半分一人暮らしだったし、今はバイトも出来る年齢なんで生活費を稼ぐぐらいならなんとかやっていけます」

まあ、誰かの施しを受けるのが気に入らないってのもあるけどな。

「ほう……では、借金はどうするのかね？」

「ぐっ」

それを言われると俺もきつい。今のところ返済の目処はまったく立っていない。毎日の生活費だって危ういというのに返済する余裕なんてあるはずがない。今住んでる家を売ったぐらいで返せる額でもないし。

「この家の養子になると言うなら、その負債もこちらで負担するよ」

な、なんという懐の大きさ。いつも人にタカッてる俺とは大違いだ……。

「で、でも、いくら親父達の親友だからって、結局は他人なんだから、そこまで迷惑をかけるのは……」

「そんな悲しいことを言わないでくれたまえ。あの二人の息子というなら私の甥も同然だ。私にはおてんばな娘が一人だね。妻にも先立たれてしまって寂しいと思っていたんだよ。それに常々息子が欲しかったんだ。君のような子が息子に来てくれるならこれほど嬉しいことはない」

「うーん、でも……」

「じゃあこうしよう」

なおも渋る俺に業を煮やしたのか、厳重朗さんはあらかじめ考えてあったかのように提案した。

「君はたぶん今こう考えている。私が両親の知り合いというのは本当だろうが、だからと言って私を完全に信用することは出来ない。それにいきなり自分を連れ去った男の施しを受けるのはプライドが許さない。なにより、孤高が好きな自分の私生活プライベートを私に乱されるのが気に入らない。違うかね？」

「……最後以外はおおむねその通りです」

嘘だ。厳重朗さんの言ったとおり、俺は一人でいることを好む。一人でなんでもこなせるということを証明したいからだ。だが、何故この人はそれを知っている？

「なるほど君が養子を否定する理由は分かった。しかし、完璧に否定的というわけではないだろう？ 今のままでは負債を返すどころか生活していくのも困難だからだ。それなら話は早い。君が私から負債額分の金を借りて私に返せばいい」

「……つまり、俺が養子になってあなたの後を継ぎ、次期社長として、自分の力で借金を返済すればいいと言いたいですね」

「おや、話が早いね」

なるほどね。ようやく話の全貌が読めてきた。

「どうだろう？ 悪い話ではないと思うがね。確かに私は信用がな  
いかもしれないが、君も知っての通り私はそれなりの地位にいるも  
のだ。下手なことをしようものなら失脚するのは目に見えているの  
だから、君をどうこうしようなどという気はないよ。君はただ私を  
利用すればいいんだ。最初はそれでいい。愛情なんて後からいくら  
でもついて来るさ」

「そうは言いますけどねえ。俺は今まで貧乏だったことを除けばふ  
っつーに生きてきたガキですよ？ そんな俺がそう簡単に会社経営  
なんて出来るとは思えませんが」

「もちろん、それに準じた学生生活も用意するつもりだ」

「ふう……」

思わず溜息が出た。どうやらこの人は何がなんでも俺を息子にし  
たいらしい。

「分かった、分かりましたよ……。俺の負けです。息子にでもなん  
でもしちゃってください」

巖重朗さんは渋みのある笑顔で頷いた。

「そう言ってくれると思っていたよ。戸籍の手続きなどの細かいこ  
とはこちらで済ませておこう。今日から君はこの家の長男、朝霧才  
悟だ」

新しく手に入れた名前は、どこかむずかゆかった。

ちょうどいい時間ということで、俺は厳重朗さんに連れられて食卓の席に着くことになった。

……っか、なにこれ？

「ん？ どうしたね才悟くん。お気に召さなかったかな？」

「いや、そうじゃなくて、これ、ホントに俺達が食うんですか？」

俺の目の前に並べられているのは、クソ長いテーブル一面を覆うほどの豪華な料理だった。まあ、うまそうだ。正直よだれが出るのを必死に我慢してるさ。でもさ、何よこの量？ これって二人分の人体に入る内容量超えてね？ 値段も量も、俺が普段取る食事の何倍にも匹敵するだろう……。

「そうだね、私と君と、あと私の娘で食べるんだよ」

援護が増えたがそれでもどう考えても物理オーバーだ。こんだけあれば軽くパーティ開けるっての。

「厳重朗さん。一つ聞きますが、これって一体何人前の料理なんで

すか？」

「うーん、大体20人分ぐらいか」

「舐めてんのかアంత」

さも当然のようにしれつと言いやがったよこの人。金持ちの考えることは分からね……。

「あの、どう考えてもかなりの量が余るんじゃないかと」

「そうかね？ 君も成長期なんだから、これぐらいはぺろっと行っちゃうんじゃないかい？」

「んな某大食いギャルのような真似はしません。つかできるか」

「ははは、分かっているよ。冗談冗談」

ケンカ売ってんじゃないだろうなこのおっさん。

「なに、気にすることはないよ。余りは使用人達の夕食になるからね。私達は好むものを好きな分だけ食べて満足すればいいんだよ」

なんとというリツチ。なにもしなくても飯が用意されているだけで感動していた俺がいかにも庶民かを実感させられる。……あ、俺庶民じゃなくて貧乏人だったわ。ははは……。

べ、べつに傷ついてなんかないんだからねっ。

「それにしても遅いなマイドーターは。そろそろ姿を見せてもいいころだが。おっと、噂をすれば……」



自爆して「の」の字を書いていると、巖重朗さんは扉に視線を向けた。俺もなんとなくそっちに目を向ける。

それはもう、すごい美少女が立ってた。

「遅れてすみませんお父様！ 勉強に集中してしまっていて……」

「はっはっは。なに気にするな。それよりもこんな時間まで勉強しているなんて、偉いぞ麗菜。よし、頭を撫でてやろう」

「うんっ！」

……うわぁ。あの年で親父に頭撫でられて喜ぶ娘っているんだな……。

などとぶしつけな視線を送っていると、それに気づいたのか、初めてその少女は俺に視線を向けた。真っ直ぐな瞳に、ちょっぴり高鳴るマイハート。ふ、惚れるなよ……。

「お父様。なにこの害虫？」

……え？ 害虫って俺ですか？

「こらこら。害虫はないだろう麗菜。彼に失礼だぞ」

「うん、そうね。さすがに害虫は失礼よね。……で、何なんですかこの豚は？」

彼女にとって豚＞害虫なのだろうか。俺にはバカにしているとい

う点で豚〓害虫なのだけど。

うむ、やはりここは一つ文句を言ってやらないとな。

「おいおいそこのお嬢さん。俺のようなイケメンを捕まえておいてそれはないだろうベイバー」

「なにこの変態？ きも……」

俺のガラスのハートは粉々に打ち砕かれましたよ。ドンマイ、俺。

「麗菜。彼は秋坂才悟くんと言ってね、今日からこの家の長男として生活することになったんだよ」

「へーそうなんですかぁ。………つてはあつ！？ 長男っ！？ この家に住むうっ！？」

「どもっす」

挫けず笑顔を返す俺。かなりの爽やかフェイスだから好印象は間違いないはず。

「以前にも言っておいただろう？ 近々新しい家族が増えるかもしれないと。えーと、才悟くんは今年で17だから、麗菜の一つ上のお兄さんになるのか。二人とも、仲良くするんだよ」

「ちょっと待ってよお父様！？ お兄さん？ この猿人類があ！？ お父様、それすっごく笑えないです！」

さすがのこれには嚴重封印されていた俺のリミッターが外れた。

「ちよつと待てくらテメエ！ 黙つて聞いてりや好き勝手ほざきやがつて！ 俺だつてテメエみたいなつるぺたが妹でがっかりだよちくしょうつ！」

「つる……っ！？　そ、そこになおりなさい秋坂才悟！　そのブサイクな面をさらに醜くしてあげるわ！」

「誰がブサメンだゴラア！　そういうテメエはロリ娘だろうが！　3つは離れてると思ったぞ！」

「なんですってええええええええええ！？」

「やんのかコラアアアアアアアア！？」

魂の激闘が終わるまでしばらくお待ちください

「はっはっは。もう仲良しさんになっただね。お父さん嬉しいよ」

どこがだ（よ）っ！

結局、叫びすぎて喉痛いし腹も減ってきたということで、第一次兄妹戦争は引き分けで幕を閉じたのだった……。

「なあつるぺた」

「あによブサメン」

「このへんてこな料理どうやって食うんだ？」

「なに？　それが人にモノを頼む態度？　ふん、これだから品のない庶民は嫌いなものよ」

「……調子に乗りやがってる麗菜さん。これは一体どのような食べたらいいのか教えやがってくださいませ」

「鼻で食べればいいのよ」

「なんとも品がございませんこと」

『……………ピキッ』

このまま二次大戦が勃発してもおかしくないぴりぴりした空気。周りで控えている使用人らしき人達ははらびくびくしていらっしやる。そんな中で厳重朗さんだけが一人穏やかに笑っていた。や

っぱりこの人は大物だ。

「……ふん」

睨み合いで先に折れたのは俺の方だった。べつに麗菜の視線に気圧されたわけじゃない。理由はどうあれ、俺は麗菜の『お兄ちゃん』になったのだ。兄貴として多少我慢せねばならないこともあるし、年上の俺がいつまでも子供のように意地を張るわけにはいかないからな。

つーわけで俺は興味を麗菜から目の前の料理に移し、無我夢中に食い漁った。ええ、食いましたとも。麗菜がドン引きするくらいに（厳重朗さんは「若いつてすばらしいね」とコメントするだけだった）。

くうくうめえー。よく考えたら最近金欠で昼以外はソルトウォーターしか飲んでなかったからな。今の俺なら大食い選手権でいいとこ行けるかもしれん。

「あ、やべ」

がつついて食った拍子に料理が俺のズボンにかかった。幸い熱を持ってる食べ物じゃなかったけど、うへえ、気持ちわりい……。

「失礼します」

どうしようかと思っていると、静かに俺の元に来た一人のメイドさんがナプキンでズボンの染みをふき取ってくれた。さすがに全部は無理だったが、なにもしないよりはずっとマシだった。

「あ、こりやどうも……ってああっ!!」

ニコッ、と目の前で微笑むメイドに俺は見覚えがあった。忘れるはずがない。なんだってさっきまで散々追っかけ回されてたのだから。

「お、おお、おまつ……」

「ああそうだ、紹介するよ才悟くん。その子は雨宮真奈美くん。これから君の身の回りの世話をしてくれる人だ」

「初めまして。今日から才悟様のお世話をさせていただく専属メイドの雨宮真奈美です。よろしくお願いします（ニコッ）」

「初めましてじゃねえーっ！ テメエあの恐怖のデスマラソンを忘れたとは言わせんぞ！」

「はう……」

俺の威圧にビビったのか、雨宮さんとやらはぺたんと尻餅をついた。そして潤む瞳で上目遣い。う、かわいいじゃねえか。

「ボソッ……女を泣かせるなんてさいてー」

「ぐっ！」

むかつくが、麗菜の言ってることは正しい。

まあ、このメイドさんもべつに俺に危害を加えようとして追ってきたわけじゃなかったんだ。市民の笑い者になったのは痛かったが、許してやらんでもないか。

「……ええと、雨宮さん。もう飯って食べた？」

「え？ いえ、わたくし達は才悟様たちがお食べになった後で食事を取りますので……」

「そか。んじゃ今俺達と食べようよ。腹減ってるだろ？」

『え？』

驚いたのは何故か雨宮さんだけじゃなかった。

「ちょ、ちよつと秋坂才悟！ あなたなに勝手なことを……！」

「さ、才悟様つ。わ、わたくしでしたらぜんぜん構いませんから、どうぞこのまま食事を続けてくださいっ」

「いや、それじゃ俺の気がすまないからさ。それにこれだけの量の飯が俺達の胃に入るわけないだろ？ 腹減ってるんだったら協力してくれよ」

「べ、べつにお腹なんて減って……」

きゅー

「……………ぷ」

「はうーっ！ わ、笑わないでくださいーっ！」

腕をぶんぶん振り回す雨宮さんを無視して、俺は巖重朗さんに眼

を向けた。

「いいですよねべつに。たかが一人ぐらい増えたって」

「……ふむ。人数が増えるのは構わないのだが、相手は使用人だからね。他の者達にも示しがつかないし、あまりいい案とは思えないが」

「特に問題ないでしょ。だって雨宮さんは普通の使用人さんとは違う、俺専属メイドなんだから。俺と一緒に飯を食えって言ってるんだから従うのは当然のことでしょ？」

「いい加減にして秋坂才悟！ どうして私達が使用人と共に食事を取らなければいけないの！ ここではこれがしきたりなの。いきなりやって来て私とお父様の食事を不快なものにさせないで！」

麗菜の怒鳴り声を無視して俺は巖重朗さんを見つめ続けた。

「ふう。まあ、たまにはそういうのもいいかもしれんな」

「お父様！？」

「さつすが、話が分かる。つーわけだからさ、ほら、飯食おうぜ雨宮さん」

「で、ですが……」

雨宮さんは俺と怒り心頭の麗菜を交互に見ておどおどしている。

「気にしないでいいさ。巖重朗さんが認めたことだから、麗菜も一



応納得してるって。それに、飯は大勢で食った方がうまいだろ？」

結局、俺の根気に負けて、雨宮さんも一緒に飯を食べることになった。

ちなみに、それから食事が終わるまでずっと麗菜が殺気を込めた視線を俺に送り続けてた。おかげで肝っ玉が冷えてろくに飯がのどを通らなかった。うーん、俺そんなに変なことしたか？

## 第2話：ツンデレの妹に憎まれて眠れないお話 前編（後書き）

この話、出来ればこの一話にまとめたかったのですが、思いのほか長くなりそうなので分割しました。基本的に一話完結式で進めていくこうと思っているのですが、これが結構難しいです。他の作家さんの技量がよく分かります。

そうそう、これから後書きにキャラクターのプロフィールをちょくちょく載せていくこうと思ってます。せっかくのスペースなんだから有効活用しないとね。というわけで今回はこの人！

秋坂（朝霧）才悟

本作の主人公。スーパーの特売と道端に落ちている小銭をこよなく愛する超貧乏学生。結構イケメン。ボケとツツコミを両立できるが、どちらかというとツツコミ派。性格は基本的に陽気で少し自虐的な面がある。たまに突拍子もない行動を取るため周囲を呆れさせがちだが、意外に頭はキレる。特技はとんずら。趣味は100円シヨツプめぐり。座右の銘は「逃げるが勝ち」

第3話：シンデレの妹に憎まれて眠れないお話 後編（前書き）

3話目からさっそく3ヶ月の放置プレイです。序盤でここまでやる気のない小説も珍しいことでしょう。

第3話：ツンデレの妹に憎まれて眠れないお話 後編

「ふおおおおおおおつ。あたたたたたたたたつ！」

バキッ

「あうちっ！」

「……何をしてるんですか？」

「いや、この窓ガラス強化ガラスっぽいからちよつと強度でも測ろうかと」

「そんな理由でいきなりガラスを叩かないでくださいよ……」

「お、なにこれ？ 壺か？」

「あ、それは旦那様が趣味で集めているものでして」

「ふーん。よし、こいつでボーリングでもするか」

「聞けばそれ一つで普通の一軒家を買えるとか」

「壺でそんなことするなんて非常識だよな、うん」

食事を取った後、俺は雨宮さんに屋敷の中を案内してもらった。なにはともあれこれからここで暮らしていくことになったのだからいろいろと把握しておかないといけないからな。それにちよつと食いすぎたから腹ごなしをしたかったのもある。

でも問題が一つあった。

「この屋敷広すぎ！」

もうかれこれ1時間以上歩き回っているが、雨宮さん曰くまだ半分も回っていないらしい。さっきみたいにおふざけをちよくちよく入れているせいもあるとはいえ、これはねーよ。

「金持ちつてのは大変だよなあ。わざわざクソでかい家を建てて権威を示さないといけないだなんて」

「え？」

「ん？ 違うの？ 俺、金持ちがでかい家を建てるのは他の金持ち連中にバカにされないようにしてるんだと思ってただけだ」

「あ、い、いえ、間違っているというわけではないと思いますけど、普通はそういうことを考える前に、大きな家に住めて羨ましいなあとか思うものだ……」

「え、そうなの？」

そんなこと一瞬も考えなかった。なんか「あんたおかしいんじゃない？」とでも言われたみたいでちよつとへこんだ。

「……その、才悟様は、変わった方ですね」

「は？」

突然そんなことを言われて俺は面食らった。

「べ、べつに変な意味じゃないんですよ？　ただ、その、雰囲気、と申しますか……まだお会いしてほんの少ししか経っていませんが、才悟様はわたくしが今まで見てきたどんな人とも違う感性を持っていらして、ふと、そう思ったんです。そう言えば、旦那様が渡してくださった調査書にも一風変わっていると書かれておりましたね」

「調査書って、俺の？」

「はい」

「へー。なんて書いてあったの？」

「確か、えーとですね……。秋坂才悟。16歳。現代ではあまり類を見ない貧乏人」

「いきなりケンカ売ってるなその調査書」

事実だから何も言い返せないけどな！

「生活の詳細は……」

「もういいよ言わなくて。なんかどんどん俺がみじめな存在になっていく気がするから」

「そ、そうですね。わたくしもあれを見たときは我が目を疑いしましたから」

どうやら俺の生活は目も当てられないぐらい酷いものらしい。

その後も雨宮さんの説明を聞きながら屋敷内を歩き回って、ちよくちよく話をしていたのだが、ちよいと気になることがあり、俺はどうしようもなくむずかゆくなってきたので思い切って言ってみた。

「あのさ、雨宮さん」

「はい、なんですか才悟様」

「それ。その才悟様っての、やめてくれないか？ どうにも恥ずいんだけど」

様付けがとても似合っていないという自覚が俺にはある。根が貧乏人だからな。だから彼女から『才悟様』なんて言われるとひじょーに背筋がかゆくなる。

「はあ……でしたら、どうお呼びすればいいんでしょうか。『ご主人様』ですか？」

「そんなん笑顔で言われたら俺萌え死にしちゃうからダメ。無難に『才悟さん』とかでいいんじゃないの？ なんなら呼び捨てでも構わないけど」

「そ、そそそそそんな滅相もない！ い、いくら専属とはいえわたくしは一介のメイドに過ぎないですから！」

「あー、とりあえず落ち着け。まずは深呼吸をするのだ」

「は、はい。すー、はい、すー、はい」

「落ち着いたか？　落ち着いたな？　ではその状態を維持しつつ上目遣いから満面の笑みでかわいく『お兄ちゃん大好き！』と言うがいい」

「え、えーと……お、お兄ちゃん大す……って何言わせるんですかあー!!！」

やばい。不覚にももえた。もちろんくさかんむりの方で。

俺が聖なる『お兄ちゃん』ヴォイスに感動していると、雨宮さんはバカ正直に実行した自分の無垢さ加減に呆れるのと台詞の恥ずかしさにより足元がお留守になり、足がもつれてお倒れになった。ごめんごめんと謝りつつ手を差し出そうとして俺はそこにへブンを見た。

「フオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

さてここでテメエらに質問だ。お前らは絶対領域なるものを知っているか？ は？ 知らない？ いいや貴様は知っているはずだお前は自分の心に嘘をついているに過ぎない認める認めるのだこれは一般常識なのだ！ さて、テメエらの頭に件の領域がぼわぼわと



浮かび上がってきたこれからが本題だ。ずばり聞こう。その絶対不可侵なる領域の、さらに向こうには一体何が広がっているか知っているか？ もしかしたら知らないかもしれないな。だが俺は知っている。ちょうどいい機会だ。知らないもののために俺がその領域の名前を教えてやろう。

女体の神秘と言っても過言ではない、絶対領域の先にある絶対空間、その名も       ” P A N T U ” と言う。

今こそ俺の秘密を明かそう。俺の体の半分はエロスでできている。

「きゃっ！ さ、才悟様どこをご覧になっておられるのですか！？  
見ないでくださいー！」

「えー」

「えー、じゃないですっ！ 何考えてるんですかあなたは！」

「 ” P A N T U ” のすばらしさを大衆に広く知らしめるにはどうすればいいか考えておりました」

「そんなこと考えなくていいです！」

「いやー、それにしても雨宮さんなかなかに過激な下着つけてるねー。もうちょっと清楚な感じのする下着も雨宮さんに似合いそうだけど、こっちの方が色っぽいね。へっへっへ、姉ちゃんいいもん持つとるのぉー」

ぶすっ

「ぎゃあああああつ！ め、目があああああつ！」

突き出された細くて綺麗な指が俺の目玉にクリーンヒットした。痛い。文字通り血の涙を流しそうなほど痛い。

「も、申し訳ありません才悟様！ わたくしったらつい……！ ああなんてことをわたくしは……！」

「い、いや、今は完璧に俺が悪かったから……」

ふう……俺としたことが、我が人畜無害の紳士の理念を崩壊させてしまったぜ。どうも俺はこういう突発的なエロティックイベントに弱い節がある。今後は気をつけなければ。まあ、今見た光景は一生忘れないがな！

「ああ、それと雨宮さん」

「は、はひ！？ か、かかかか覚悟はできております！ どんな罰も受ける所存です！ そ、それと、わたくしめも一応一人前のメイド故、そ、その……お、おおお、お望みとあらば……多少えっちなことでも……」

「今夜ノーパンで俺の部屋へ来い」

「ふええええっ！？」

いかん、あまりに魅力的な言葉につい本音が。

「冗談冗談。てか、俺が言いたいのはそんなことじゃなくて、名前」

「……はい？ 名前、と言いますと……？」

「あのね、君はさっき俺が言ったことをもう忘れたのか？」

「……………あ」

「まったく、たった数十秒前の話だというのに。雨宮さん、まさか若年性健忘症？」

「って！ 才悟様が変なことを言わせるからわたくしが転んだりしている場が混乱したんじゃないですか！」

「バカヤロウ。この俺に仕えるというのならその程度さらりと受け流して見せろ。……いや待て、そうなるとせつかくのリアクションを楽しむことが出来ないな……やっぱり、存分におろおろしてくれ」

「そんなあゝ。勘弁してくださいよ才悟様……」

「ほら、また」

「うつ……で、でも、やはりわたくしはあなたに仕えるものであつて、決して対等な立場に立つものではないのですよ？ 必要以上に仲良くしてしまつては……その、間違いが起こらないとも……」

「雨宮さんは間違いを起こすつもりなの？」

「い、いえ！ わたくしなにかが滅相もない！」

「じゃあ、問題ないだろ。俺がいいって言ってんだから、気にしないでよ」

「そ、そういうわけには……」

「……俺はね、正直言つと、どちらかといえば一人でいることを好むんだ。必要以上に誰かの助けを借りるつてのが個人的に気に入らなくてね。だから本音を言えば、君みたいなメイド、俺には必要ないんだよ。」

まあ今は、ここににいる以上はそういうのが俺の傍にいるのも仕方がないって妥協してるけどね。俺だってメイドさんの仕事を奪つてまで安いプライドを押し通したいとは思わないよ。でもどうせ傍に置くなら俺は兩宮さんと仲良くなりたい。友達として……とまでは、さすがに言わない。でも、主人と従者の関係つてだけは止してくれ。俺は様付けなんてされる柄じゃない。頼むよ、兩宮……真奈美さん」

好意の印も込めて下の名前で呼んでみる。真奈美さんは少しあたふたとしたけど、俺が真剣に見つめ続けると、観念したかのように肩を落とした。

「……ハア。分かりました。それでは、これからあなたのことを、才悟さん、と呼ばせていただきます」

「うん、それでいいよ。よしよし、素直な子は好きだよ俺」

「あ、頭をなでないでくださいよ……!」

「お、照れてる照れてる」

「べ、べつに照れてなんていませんよ!」

「（ぐっ）ナイスツンデレだ、真奈美さん」

「そんなんじゃないやありません〜!」

「ははは」

「~~~~~っ!」

「おっとっと」

ムキーツ、とでも言いそうなほど子供っぽい仕草で俺を威嚇すると、真奈美さんはぶんすか起こりながらさっさと先に行ってしまった。ありゃ、少しいじり過ぎたか。

「それにしても、主人をほっぽり出すメイドってのはどうなんだ？」

……まあ、俺としてはこっちの方が嬉しいけどね」

これからの生活、正直不安だらけだったけど、なんか、うまくやっていけそうな気がしてきた。

「おーい、待つとくれー」

少し小走りで真奈美さんを追って角を曲がる。

「……瞬間移動？」

クソ長い廊下には真奈美さんの姿はなかった。

「まあ現実的に考えて消えるわけないわな」

おそらくこの通りのどこかの部屋に身を潜めているのだらう。ま

ったく、少しからかわれたぐらいで拗ねちゃって。うむ、かわゆいね。

とりあえず俺はテキトーに近くの部屋を開けてみた。

そこに、下着姿の我が義妹がいた。

『……………』

麗菜、現実を認識できず硬直。

俺、麗菜の胸をガン見。

沈黙を打ち破ったのは俺だった。

「不合格」

「ちよっとっ！ どこ見て言ってるのよあなたっ！！」

「いや、だって、ねえ？ うう、あまりの貧相さに涙が……」

「貧相って言うなあああああああっ！！」

「それになんだよお前その格好。下着だけじゃねえか」

「しょうがないじゃない着替えてたんだからっ！」

「バカヤロウ！ 着替えてる最中ならなおさら服を着崩した状態じゃないとダメだろうがっ！ いいか、女の下着ってのはなあ、乱れた衣服からチラツと見えるのが一番萌えるんだよっ！ そんなことも分かんねえのか貴様わっ！」

「知らないわよそんなのっ！ それよりいつまで見てるのよっ！」

「お、いいねシートで身を覆うその姿！ 本人は隠せているつもりで微妙に見え隠れする下着が大変くっじょぶです！ 合格うっっ！」

「ぜんぜん嬉しくないわよバカアアアアアアアアッ！！！」

しかし、まあ、綺麗なことだ。

一見平常心を保っているように見える俺だが、内心は結構いっぱいいっぱいだったりする。さっきも言ったが、俺は振って沸いてきたエロイベントに弱い。加えて、麗菜は口は悪いがそれを除けば、俺が知るどの女よりも綺麗で……その、かわいい。胸は正直これかに期待だが、細くすらっとした手足に、キュツと締まったウエスト。神ががりのなまでに整った顔。そんな女が、俺の前で下着姿でいるのだ。これは、なんというか……卑怯だ。

「助けて修司っ！ 変態ノゾキ魔に犯されるーっ！！！」

「い！？」

いきなり何言い出しゃがるこのアマ！ ヤバイどうしよう。客観的に見て悪いのはどう考えても俺だしこれじゃ言い訳のしようが

「そこまでです」

いつの間にか叩き伏せられて拳銃突きつけられました。

「ちよと　　つ！！　なにこの急展開！？」

「黙りなさい、一言でも喋れば心臓を打ち抜きます」

[illegible]

く、バカな！　今まで幾度となく暴君を退けてきたこの俺が、  
んの気配も感じないまま呆気なく組み伏せられてしまうとは！

「我が主、朝霧麗菜様に対する不埒な行為。人生を七回捧げようと償えない罪です。覚悟はできていますね？」

「あなたこそ、覚悟はできているのでしょぅね」

!?

俺に銃を突きつける男が驚いて振り返ると、そこには日本刀を突きつけて仁王立ちする 真奈美さんがいた。

「まさかの救世主キタ  
ツ！」



もう何がなんだか。

「雨宮さん、ですか？ これは一体どういうことでしょうか」

「それはこちらの台詞です、伊達さん。あなたは誰に向かって銃を突きつけておられるのですか？」

「誰、と言われましても、不埒なノゾキ魔に……」

そう言つて男は初めて俺の顔を見た。うおっ、スゲー美形の兄ちゃんだ。

「さ、才悟様！？ も、申し訳ありません、とんだご無礼を！」

慌てて俺を解放してひざまづく兄ちゃん。えーと……。

「真奈美さん、説明プリーズ。俺訳分かんないんですけど」

あと、できればその日本刀しまってください。メッサ恐いっす。

「あ、はい。えっとですね、その方は伊達修司さんと仰つて、麗菜様専属の執事なのです」

「え、執事？」

「はい、ご覧の通り」

真奈美さんに促されて視線を送ると、

「このバカ修司！ なんであいつを解放してるのよ！」

「し、しかしお嬢様、あの方は先刻ご報告にあつた秋坂才悟様なの  
でしょう？ 私ごときが手を出すわけには……」

「何言つてんのよ根性なし！ いい？ あいつはあるうことかこの  
私の下着姿を見たのよ！？ こ、この、私の、誰にも見せたことな  
い、ああああられのない姿を！ しかも！ あるうことか私の胸を  
侮辱するなんて！ 修司っ！ とにかくそいつ殺っちゃいなさい！  
」

「お嬢様。あなたは朝霧家の娘なのですから、そのような物騒な発  
言は控えてください……」

「うるさいうるさいうるさーいっ！ いいからさっさとそいつ殺し  
なさいよーっ！」

……うん。俺、将来執事にだけはなりたくねえわ。

「にしても、ずいぶんと若いな。執事つてもつとこう年配のイメー  
ジがあつただけど」

「ええ、年配の方の方が細かい気配りもできますし、また人生経験  
が長いですので主人の相談事に乗つたりできますからね。ですが、  
彼は若輩ながらも執事としての実力は一級です。主人の身の回りの  
世話から危険分子の排除まで、たった一人で対応可能です。かくい  
うわたくしも、才悟さんを全力でサポートするため、一級のスキル  
を持ち合わせております」

それであの日本刀っすか。

「それにしても才悟さん。いくらなんでも初日に麗菜様の着替えをノゾクなどと、不謹慎極まりないですよ」

「ちょ！ それ誤解！ てか真奈美さんが急にいなくなるから探してたんじゃなか！」

「だ、だってそれは才悟さんがおかしなことを仰るから……！」

ああマズイ。また話がややこしくなってきた。思考がうまく働か  
ねえ。

「だあああああああ！ と・に・か・く！ テメエら全員そこに  
正座しやがれ つ……！」

「囚人点呼ー、開始っ。 雨宮真奈美！」

「え、えと、はい！」

「伊達修司！」

「ここに」

「朝霧麗菜！」

「あんた何様？ 死ねばいいのに……」

このアマ、シバき倒したるか。

しかも奴め、俺が正座しろと言ったのに一人だけベッドに座ってあまつさえ携帯をいじり出すとは。こんなのが日本を担う大企業の娘だと思つと心配でしようがない。

「ハア。まあとりあえず、真奈美さんにはあとで『30秒間パンツガン見の刑』に処するとして……」

「え！？ それって本気ですか！？」

「バカ言え、本気なわけあるか」

「そ、そうですね。もう、驚かさないでくださいよ……」

「俺が本気になったら、『一日中ノーパンの刑』に処するに決まってるじゃないか！」

「爽やかな笑顔でサムズアップ ツ！？」

真奈美さんは正座から体育座りに移行してしくしくと泣き始めた。  
ああ、かわいい……。

「それで修司さんが……まあ、本人としては主人を守ろうとして

の行動だったんだし、その忠誠心に免じて不問っつーことで

「ありがとうございます」

「で、最後に麗菜なわけだが……」

「気安く呼び捨てにしないでくれる？ 虫唾が走るから」

「じゃあ、レイぴょん」

「変な名前で呼ばないでよ！」

「なんだ、うさぎ風は好みじゃないか。ならレイにゃん」

「好みとかそういう問題じゃないから！」

「そう興奮するなよマイシスター」

「妹って言うなーっ！！」

うるさい奴だな。

しかし、ずいぶんとまた嫌われたもんだねえ。

「まったく、こんなイケメンな兄貴が出来て一体何が不満なんだか」

「ハア？ ブサメンがホラ吹いてんじゃないわよ」

「……………（ピキッ！）」

おーけー。落ち着け俺。こいつは年下。俺年上。ここは大人の振る舞いを見せねば。

「まあそう嫌うなよ。さっきのはその、確かに俺が悪かった。ごめん。反省してる。だが、お前だっていけないんだぞ。そんな綺麗で魅力的な体をしているんだから。男なら飛びつかない方がおかしいんだよ」

「うざい、きもい、喋るな」

褒め殺し作戦、失敗。

「……そ、そうだ。俺、こう見えて肩揉みとかすげー得意なんだ。お前、肩こってないか？ もしそうなら俺が揉んで……」

「寄るな駄犬」

スキンシップ作戦、失敗。

「……………そ、そう言えばさ、麗菜って今年で高校生になるんだよね？ いやー、麗菜って頭良さそうだもんな。きつといい学校に決まったんだろ？ でもさ、進学となるとやっぱりいろいろ不安とがあるよな。そうだ、もし勉強で行き詰るようなことがあったらさ、俺が教えて……」

「あんたみたいな低能に教えてもらうくらいなら小学生に聞いたほうがマシよ」

「……………（ピキッ！）」

「さ、才悟さん落ち着いて！」

「離してくれ真奈美さん！ この生意気だったんが俺のことを『お兄ちゃん』って呼ぶように調教してやる！」

「お、お嬢様落ち着いてください！」

「離しなさい修司！ この自意識過剰なブサメンに巨乳の愚かさを叩き込むのよ！」

俺と麗菜はメイドと執事を振り切って対峙する。

「おもしろい、自他共に認める巨乳スキーマであるこの俺が、貴様のようにつるぺたに屈するとても？」

「悪いことは言わないわ。今すぐ土下座しなさい。そうすればお仕置きだけは勘弁してあげる」

「はっ、やってみさせ」

俺はよゆーの表情でふんぞり返る。何をするかは知らないが、今まであらゆる危機を乗り越えてきたこの俺が、こんな口り娘にやられるなど、それこそビームサーベルでも持ってこない限り

ドゴンッ！

「ちっ、外した」

サーベルはなかったけど、ハンマーは持ってました。

「待ていつ！ テメエ今俺が避けなかつたら間違ひなく潰されてたぞ！？ ていうか『10t』ってお前化け物かよ！」

「うっさいわね！ いいから黙って挽肉になりなさいっ！」

「きや                    つ！！」

第二次兄弟戦争、スタート。

結局、建物内と言わず屋敷内を完璧に把握できるぐらい追っかけ回されましたよ。自分、一睡もできなかったですよ。しかもばたんきゅーしたバカを背負って帰るのは俺の役目でしたよ。

とにもかくにも、こんな感じで朝霧才悟の記念すべき一日が幕を閉じた。

……俺、これからホントにやっていけるのかな。



### 第3話：ツンデレの妹に憎まれて眠れないお話 後編（後書き）

うーん、ラストの方はもう少し話を広げたかったですけど、現段階では才悟と麗菜の口ゲンカくらいしか書けないですからね。あんまりだらだらするのも嫌いなんでちよつと無理やりまとめました。まあ、この話は屋敷内での主要人物の紹介的な意味合いを持っていたので、その点はクリアされているのでよしとしましょう。

さて、次回からは彼らの春休みの日々をつらつらと何話か書く予定なのですが、はっきり言って内容はまったく考えてません（マテ）。まあ基本的に作者はパソコンの前に座ってから内容を考え始める超無計画野朗なんで、次の話も妙なテンションだったらそれなりのが書けるでしょう。あんまり期待しないでくださいね。感想お待ちしています。

第4話・サイコはうれしくなると、つい、ヤッちゃった (前書き)

才悟の変態キャラが確立してきた今日この頃。



「しょうがないわね。はい水」

「おうサンキュー。……うん、この突き抜けるような辛さはまたしてもタバスコじゃねえかちくしょおおおおおおおおおつ  
つっ！！」

痛い！ 辛いを通り越して痛いよママン！！

「ふん、これに懲りたらとつとこの家から出て行くことねクズ」

「こんのクソアマアアアアアアッツ！！ 朝ぐらい静かに過ごそうと思っただがもう我慢ならねえっ！！ そこになおりやがれ！ 伝説の山嵐を見舞ってくれるわ！」

「お、落ち着いてください才悟さんっ！ きゃわっ！ なんですれ違いざまにわざわざスカートをめくるんですかばかーっ！！」

「ばっ！ ど、どさくさに紛れてどこ触ってんのよこの変態っ！ 修司、このクソバカを目も当てられないぐらいグロテスクに殺りなさい！」

「だから、お嬢様、何度も言いますがお言葉には気をつけてください。それに、今回の件は明らかにお嬢様が悪うございます」

「にやにー！？ あんたこの私を裏切ってこんな奴の味方するつもり！？ お父様に言いつけてやるっ！」

「ああお嬢様私が悪かったですからハンマーをむちゃくちやに振り回さないでください！ 才悟様が文字で表現することすらはばかれ

る酷い状態になっております！」

「うるさーいっ！ みんなして私をバカにしてっ！ どうせ私は真奈美と違って貧乳よ悪かったわね悪かったわよごめんなさいねえ！  
？ こんな脂肪の塊のどこがいいって言うのよーっ！」

「だ、誰もそんなこと言って……きゃっ！ れ、麗菜様、そ、そこは……っ！ ん……は……やあ、だ……だめ……」

「その手を離しやがれつるべたがーっ！ 真奈美さんの乳を揉んでいいのは俺だけだーっ！！」

「そんなこと許可した覚えありませんよーっ！！」

「みなさん冷静に！ ああもう、なんで私ばかりこんな役目を……」

今日も今日とて、俺達の朝は賑やかだった。

俺が朝霧家の養子になってから、それなりの日数が経過した。

最初は戸惑うことばかりで精神が磨り減ったが、さすがにそろそろ慣れてきたのか屋敷での生活には順応してきていた。真奈美さんに朝起こされてそのままおはようのちゅーしたり、麗菜の振り回すハンマーから逃げるスキルも上がり気がつけば奴の調教も進んですっかり俺の奴隷にしてやったし、溜息をつく修司さんの困った顔を見るのも、みんな日常風景と化しているぐらいだ。（一部若干のフエイクが含まれています）

じゃあ思う存分春休み満喫すつかー！……と思ったけど現実はそのなかに甘くなかった。厳重朗さんめ、本気で俺を次期当主にするつもりなのか、帝王学などの類を勉強することを俺に強要してきた。最初は拒否ったが、それなら借金の返済はどうするとか脅されたり麗菜に「お父様、こんなバカに学ばせるのは”低能学”で十分ですよ」などとふざけたことを言われたのでついムカツとなって承諾してやった。今では心の底から後悔している。リーダーとしての心構えなんぞ知りませんですよ。

ちなみに先生は真奈美さんだ。この人、ただの天然ドジッ娘だと思っていたが、意外にも本当にいろんな面で一級だった。甲斐甲斐しく身の回りの世話をしてくれるし、教え方もうまかった。この前気配もなく修司さんの後ろを取ったことから運動能力高そうだし、なんというか、こういうのを完璧超人と言っんだなあと思った。

しかし、そこはやっぱ真奈美さん。ここぞというところでドジッ娘属性を発揮して大失敗を犯してくれる。俺の愛情表現いじわるにも実においしい反応をしてくれるしね。メイドさん最高！

……最高すぎて俺自身が墮落しないかが目下の悩みでもあるんだがな。

でもまあこんなのは贅沢な悩みだよなー、と思いながら、俺は広い自室にぼつんと置かれている机に座る。時計を見れば、そろそろ真奈美さんが来て授業が始まる時間だ。今日は一体どのような辱めを与えてやろうか、くけけ。

「今日はお勉強はお休みにします。ごゆっくりなさってください」

部屋に來た真奈美さんは笑顔でそう告げるとすったかと出て行きました。

「俺の素敵な妄想を返せーっ！」

俺は悲しみの涙で枕を濡らした。生殺しなんてひどいよまなみん！

「ちつくしよー。なんでいきなり休みなんて言い出すんだよー」

ふむ、やはり授業中にいじめすぎたせいだろうか。でも俺に学を教えることは厳重朗さんから言いつけられてることのはずだから、勝手に休みをあたるなんて……いや、教育過程はすべて真奈美さんに任せているのなら不自然ではないか……？

「やっぱり、これからはいたずらもほどにした方がいいかな」

事故を装ったパイタッチはアウトだろうか？ さり気なくパンツをのぞくのはセーフだよな？

「しかし、休み、休みねえ。何しよかつなー」

よく考えたら、最近は学校もバイトもないはずなのにいつもより忙しかったからなあ。まとまった時間がとれたのは久しぶりだ。外に出かけるのもいいけど、これを機に屋敷の人とさらに親密になるってのもありか。どうしようかな。

1・食堂に行く

2・庭に出て見る

3・コサックダンスで町を徘徊する

さて、出ました俺の未来を決める選択肢。妙な選択肢が混ざるのはご愛嬌だ。

俺としてはぜひとも3を試してみたいのだが、実際にそんなことしたら下手すりゃヤンキーに絡まれかねないので遠慮するとして、食堂か庭か。

.....。

「よし、決めたぞ！」



#### 4・部屋でだらける

はっ！ 既存の選択肢に縛られる軟弱な主人公とは違うのさ！

「では、思う存分だらけさせてもらおう」

だら～

だら～

だら～

だら～

だら～

だら～

はい、飽きました。

「てか、よく考えたらこの部屋娯楽系がなんもねえんだよなあ」

無駄に広いばかりで、あるのは勉強時に使う机とホワイトボード、それと小難しい本ばかり入った書棚。あとは真奈美さんが淹れてくれたお茶を楽しむテーブルセットと、ふかふかベッドしかない。

……あれ？ これって本当に高校生の部屋ですか？

あ、ありえねえ。今時ゲームどころか漫画や雑誌の類すらないなんて！ そりゃ俺は元々貧乏だったからそんなに娯楽的な物は持っていなかったけど、空いた時間を潰すぐらいは出来たというのに！ この部屋で一体どうやって時間を潰せと！？ 枕投げでもしろってか！？

とりあえずやってみた。

「あ、やったなー。それじゃあこっちも、それー。あははー」

観客のいない一人芝居ほど悲しいことはないと俺は学んだ。

「だ、ダメだ！ このままじゃいけない！ なんとかこの由々しき状態を打破しないと！」

街に出て小説でも買ってこようか。いやでもたった一日暇を潰すためだけに本一冊買うなんて俺にはとても……。

あ、そうだ。

「俺んちから俺の私物よこしてもらえばいいじゃないか」

いきなりヘリに拉致られてそれ以来家には帰ってないから、今の俺は携帯すら持ってない。そうだよ、なんで今までこんな大事なことを放置してたんだろう。あの家には俺の大事なものがたくさんある。そう、友人に『俺が死んだらこいつらを棺桶に入れてくれ』とすら頼んだ命の次に大切なお宝　　エロ本が。

はっ！　どうせ俺はエロスさ！

「おい真奈美さん。来ておくれー」

ピー、と笛を吹いて俺は真奈美さんと呼ぶ。笛は真奈美さんが「何か御用がおりでしたらそれを吹いてお呼びください。屋敷のどこからでもかけつけます」と言ってくれたものだ。試すのは初めてだが、こんなちゃんな笛で本当に呼び出せるのだろうか。

「お呼びでしょうか、才悟さん」

すげえ。吹いてから5秒で登場してくれた。　　　　　なぜか天井から。

「忍者かあんたは！」

「はい？」

何か変でしょうか、と言いたそうな顔で真奈美さんは首をかしげた。なんだろう。俺は至極正しいツツコミをしたはずなのに、どう

してこんな顔されなきゃいけないのだろう。

…… ああ、そう言えばこの人天然さんも入ってたね、そういや。

「それで、御用はなんでしょうか？」

「ああ、うん。あのさ、俺っていきなりこの家に住むことになって前の家の物を持ってくる余裕とかぜんぜんなかったでしょ？ だから出来れば私物を取りに行きたいなーと思うんだけど」

「あの、知らないんですか？ 才悟さんのお宅でしたら、既に引き取られていると思いますけど」

……

……

…

「なんですとおおおおおおおおおおおお！？」

「ど、どうしたんですか？ いきなり大声を上げて……」

「シットッ！ マジかよマジなのかよマジなのですかよ！？ ヘイ、ミスアマミヤ！ てーことはオイラの個人的な所有物もまとめて廃棄されちゃったのですかい！？」

「はい、おそらく」

「神は死んだっ！！」

俺は再び枕を濡らす羽目となった。

か、勘違いしないでよね！　これは涙なんかじゃないんだからね！  
ホントなんだからね！

腹いせに真奈美さんをからかった後、俺達は失われた帝国を取り戻すために旅に出た。

すまん、嘘だ。ホントはただ調度品やらを買いに街に來ただけだ。あまりの私物のなさに苦言を呈した俺に真奈美さんが提案したのだ。もちろん厳重朗さんにも許可はもらってある。しかも、「お金はいくら使っても構わないよ」と目玉が飛び出るほど嬉しいお言葉までくださった。俺の中で厳重朗さんの地位が神に上り詰めた瞬間である。

「さて、それでは才悟さん、一体何かからお買い求めになりましたでしょうか？」

そう言っただけの俺の傍らに立つ真奈美さんは今となっては見慣れたメ

イド姿だ。ただし街の方達にはそうではなかったようで俺達はものすつこい注目を浴びていた。そりゃそうだ。日常的にメイドが徘徊するような街は某電気街などの特殊な場所だけだからな。

んで、羞恥プレイの原因となっている真奈美さんはそのことをぜんぜん意に介していない。なので俺も何もツツコまなかった。こういうときは堂々としてればいいのだ。

「うーん……マナーがインフィニティだと逆に何から買えばいいのか迷うな。ここはまずマイ茶碗からか？」

あまりの所帯つぷりに言った俺自身が泣きたくなった。どこまでも貧乏性が染み付いた我が精神。存分に笑ってやってくれ、ははは。

「とりあえず、以前の家にあった私物の類から当たって行ってはどうですか？」

「そうだな、そうするか」

というわけで、俺の私生活においてもっとも必要なものは何かを思い浮かべながら俺達は歩いた。すると、俺の足は水を得た魚のようスムーズに動いて、エロ本屋にたどり着いた。

「才悟さん」

「なんだいまなみん」

「歯、食いしばってください」

店内に入った瞬間に放たれた容赦ない平手に意識が飛びそうになった。いや、もちろん冗談でしたよ？ さすがの俺もおんにゃのこ

連れてエロ本買うような度胸はないですよ？ 本当ですよ？

「まったく才悟さんは！ 次へ行きますよ次へ！」

「はいっす」

気を取り直して別の場所に向かう俺達。

向かったのは大人なビデオ屋さん。

日本刀の輝きを見た瞬間に俺は土下座しましたよ、ええ。

さすがにこのままだと完全に真奈美さんに呆れられてしまうので真面目にすることに。つーわけでまずは携帯シヨップ。

「こゝ、ここですか？」

「そうだけど？」

何故か真奈美さんが気後れしている。べつにここにエロいものなんてないはずだが。携帯が美少女に擬人化しているのならともかく。

「やっぱり携帯がないといろいろ不便だからな。真奈美さんと番号とか交換したいし」

「はえ！？ ……そ、そうですね、はい」

笑顔の裏に困ったオーラが隠れていた。どうしたんだ？ ……まさか、俺と番号を交換するのがイヤとかじゃないよね？

「うーん、いつもなら携帯なんてゼロ円の奴しか買わないんだけど……」

ふふふ、今の俺には厳重朗さんという最強のバックアップがいるのだ。ここは優雅に最新機種をゲットだぜ！

4万5千円。

「ぐふっ」

「えっ！？ なんでいきなり吐血なんですか！？」

早くも挫けそうな俺。俺は諭吉さん一人で補えない買い物をする精神的にダメージを負うのである。

「ゼロが……ゼロの大群が……襲い掛かってくる……！」

「さ、才悟さん？ あの、お金ならありますから、遠慮なんてしないでいいんですよ？」

「そ、そうだよな！ 今の俺金持ちだもんな！ 勝ち組だもんな！ これぐらいの買い物どうってことないよな！」

意を決してサンプルを掴む。



「っ！？ こいつ、重いぞ！？」

「えっと……普通に軽そうですね？」

「違う、こいつは物理的な重さじゃねえ……！ これは、金の重みだ……ッ！」

俺は諭吉さん一人で補えない商品を手にとると通常の10倍の重みを感じるのである。

「くっ、やはり俺に最新機種は荷が重すぎたか。うーん……そうだな。なあ、真奈美さんがどんな機種使ってるのか教えてくれない？」

「はひ！？ わ、わたくしのですか！？」

「うん、このままじゃ長引きそうだから、真奈美さんと同じような機種にしようかと思って」

「そ、それはとても恐縮なんですけど、でも、あの、わたくしの使っているのなんて大したものじゃないですから！」

「ああ、性能の面は大して気にしないから大丈夫だよ」

最低限電話とメールが使えればあとは適当でいい。

「とりあえず真奈美さんの携帯見せてくれよ」

「だ、ダメです！」

「え、なんで？」

「だ、ダメなものはダメなんです!」

もしかして、俺なんか携帯を見られるのなんてたまらないわということなんでしょうか。すまん、誰かハンカチかティッシュを用意してくれ。俺の柔な心が今にも決壊しそうなんだ。

「ぐすつ、ごめん真奈美さん。俺なんか真奈美さんとパールツクなんて図々しいよね。えぐつ、俺なんて目の前にいられるだけで不快だよ。ブサイクでごめんなさい。生まれてきてごめんなさい」

「そ、そういうことじゃないんです。べつに才悟さんに意地悪してるわけじゃなくて……」

「じゃあ、見せてくれる?」

「だ、ダメです!」

「鬱だ、死のう」

「~~~~~っ! わ、分かりましたから! ちょっと待っていてくださいっ!」

唐突に真奈美さんは店を出て何処かへと走り去って行かれた。訳が分からずその場で呆然としていたら、数分と立たずに真奈美さんが舞い戻ってきた。

「こ、これが私の携帯ですっ」

「こ、これは……!」

……黒電話？

「さあ才悟さん！ 番号を交換しましょう！」

「ああ、うん。その前にひとついいかな？」

「なんですか？」

「これってさ、『冗談だよな？』」

「あ、あの……いちおう、本気、なんですけど」

「あんまり舐めたこと言っとシバくぞコラ」

「だ、ダメ……ですか？ これだってほら、ちょっと古いですけど、操作も簡単だし、ちゃんと電話も出来ますよ？」

「真奈美さん、いいことを教えてあげよう。携帯っていうのは、携帯電話の略なんだ。常に携帯できる電話だから携帯電話」

「だ、大丈夫ですよ！ これだって、リュックなんかに入れて運べば十分携帯できます！」

「どこの世界にそんな重いもん背負って街歩く奴がいるんだよ！？ しかもそれじゃ番号もメアドも交換できねえよ！」

「め、めあど？」

おいおいおい嘘だろ嘘だと言ってくれよ真奈美さん。

「なあ、もしかして、真奈美さんってさ、携帯持っていないの？」

「……………はい。その、恥ずかしながら、わたくし、機械はどうにも苦手です」

「クエスチョンワン。パソコンを立ち上げるにはどうすればいいですか？」

「ええっ！？ パソコンって立ち上がったりますんですかっ！？」

なんだこの天然記念物。ホントに現代日本の10代か？

「うっ、呆れられた…やっぱりわたくし変なんですね…だからダメだと言ったのに…」

一応自覚はあったらしい。

「しかし、携帯すら扱えない機械音痴か」

ちょっと天然だけどそれ以外は一級じゃなかったのか、真奈美さん。いや、俺としては新たな萌えポイントが見つかって嬉しいんだけど。

「じゃーちょうどいいや。これを機会に真奈美さんも携帯買おうぜ」

「ええーっ！？ わ、わたくしが携帯をつっ！？」

そんな驚かんでも。

「真奈美さん、これからはデジタルの時代なんだから、苦手でもちよつとは慣れとかなないこれから大変だぜ。大丈夫、使い方なら俺が教えるからさ」

「で、でもでも、メイドであり先生でもあるわたくしが才悟さんに教えてもらっなんて……」

「ぐすつ。そつか、真奈美さんは俺みたいなクソ野郎なんかには教えを乞いたくないんだね（泣）」

「わ、分かりましたから！ 携帯買って才悟さんに教えてもらいますから自虐モードに入らないでくださいーっ！」

てなわけで、俺と真奈美さんの記念すべきお買い物第一品目が決定しましたとさ。

それからも適当にぶらつきながら調度品を買いあさり（宅配郵送だから手荷物なし、なんとというブルジョアぶり！）、ちよつどいい

時間ということで休憩と昼食を兼ねてファーストフード店に入った。ポテトの値段がぼったくりとしか思えない意外は財布に良心的なあの学生の味方である。

「……………あの、ここに入るんですか」

「ん？　なんか問題ある？」

「いえ、その、食事と休憩を取る、という目的は達することができるとは思いますけど……………その、なんというか、いろいろと雰囲気がすぐわれないと言いますか……………」

残念ながらメイドさんの味方ではなかったようである。

「そうかなあ。べつに問題ないと思うけど。ほら、俺らぐらいの年頃なんてそこらにごろごろいるし」

ハア、と真奈美さんは溜息。

「才悟さん、失礼なことを言いますが、今まで女性の方にモテたことはありませんか？」

「ははは、なんだい真奈美さん嫉妬かい？　でも大丈夫、生まれてこの方女の子と付き合ったことなんてないZE！」

涙を流しながらサムズアップする俺。ち、違う！　俺が悪いわけじゃないんだ！　出会いがなかったただけなんだよお！

「やっぱり。才悟さん、いい機会だから言っておきますが、あなたには女性をエスコートするのが下手すぎます。いいですか才悟さん、

紳士というものはですね、常に女性の方を気にかけるものであつて……」

「なんだか知らないが真奈美さんによるジェントルマン講座が始まった。」

「いや、まあ、真奈美さんの言いたいことはなんとなく分かるんだ。俺だってそこまで頭は悪くない。つまりせっかくのデート（と思つていいよね？ よね？）なんだからもつと小じゃれたカフェみたいなどこでランチとか食べて食後はコーヒー片手に語らいましようよということだろう。でもごめんね、俺は生まれてこの方そんな飲み物一杯だけでコンビ二弁当が買えてしまうような店には入ったことないし、そんな勇氣もないんだ。だって俺はドケチだから！」

「なんて真奈美さんの講座を聞きながら自虐モード入ってたら列が進んでも俺達の番は目の前だった。俺は何とか真奈美さんにファーストフード店の良さを説いて納得してもらい、ちよいどいいタイミングで俺達の番となった。」

「わあ……ハンバーガーってこんなにたくさん種類があるんですね。わたくし、こういうところは入ったことなかったので驚きました」

「俺としては真奈美さんのメイド姿を見ても一転の曇りもない笑顔を浮かべてる店員さんの方が驚きだった。この店員……やる！」

「あー、こんなにいっぱいあると迷います。才悟さん、何かお勧めつてありますか？」

「そつだなー」

待ってました、とばかりに俺の脳みそはフル回転。そして鮮明に映し出される未来の妄想。<sup>ヴィジョン</sup>

『あう！ お、大きすぎて食べれませんよ才悟さ〜ん！』（かぶりつけない大きさに涙目の真奈美さん）

イケルッッ！！

「これだ真奈美さん。これを食べなさい。ていうかこれ以外は認めません」

「は、はあ……それじゃあわたくしはこれで」

グッ！（隠れてガッツポーズ）

「はい、こちらのセットですね。そちらのお客様はどうなさいますか？」

「あ、はい。それじゃあ俺は……」

そう言っただけ俺が指差そうとするのはこの店で一番高いセット。そう、今までまったく手が出せなかったが、今の俺は金持ち！ つまり勝ち組！ こんな高い奴もポンポンと注文できるんだぜ！ ふはははは！ ひれ伏せ愚民ども！

「ただいまなら期間限定でこちらのセットがお安くなっておりますが、いかがでしょうか」



「じゃあそれで」

俺即答。超即答。どんなに金持ちでもしよせん俺は俺だった。ぐすん。

「はい、承りました。以上でよろしいですか？」

「あ、すいませんもうひとつだけ」

「？ 才悟さん、まだ何か食べるんですか？」

「ふふふ、違うよ真奈美さん。実を言うとね、これは最近友達に教えてもらったんだが、会計の最後にこのファーストフード店でのみ使える呪文を唱えて、あるポーズをすると1割引券がもらえるんだよ！」

「……………」

「ごつつ胡散臭そうな目で見られました。

「あ、信じてねえな。よーし見てろよー。俺の華麗なポーズを見ろ！」

最初に腕を胸の前でクロスする。続いて手を叩く。そして爽やかな笑顔でばんざいして呪文を発する！！

「らん らん るー」

ザ・ワールド！　くそして時は止まるく

……。

……。

…。

「以上でよろしいですか？　お客様」

「……あー、はい。それだけで」

もらったのはスマイル0円と変人の名誉だけでした。　いつそ殺してくれ。

「あの野郎……！ 今度会ったら骨も残さず灰にしてやる……！」

嘘八百を並べやがった友人に呪詛を吐き続ける俺。しかもそれに夢中になってるおかげでいつの間にもやら真奈美さんはバーガーを食い終えて俺の妄想は虚空の彼方へと飛び去ってしまい、ますます恨みつらみを吐きまくる。もう…犯罪おかしてもいいよね…？

「うつつ……ボタンがいつぱいあって何が何やら……。ええと、アドレス帳…？ 登録…？ ペア機能…？ ぜ、ぜんぜん分かりません……」

食事を終えた真奈美さんは取説を片手に携帯電話という文明の利器に立ち向かっていた。苦手と言いながらもやる気はあるようだ。結果はダメダメだけど。致命的なまでの機械音痴にいきなり携帯は荷が重すぎたかな。

「真奈美さん、細々とした機能は今はいいいからさ、まずは通話とメールだけ使えるようにしよう」

「わ、分かりました」

それでは、説明書に代わりまして才悟がお送りします。

とりあえず、俺のアドレスと番号を送って、それを素に実際にやってみることにした。しかし俺は真奈美さんの潜在能力を侮っていた。なんと一番簡単なはずの通話の仕方を覚えるだけで1時間かかったのである。ペアルックにしたいなんて我を通さずに真奈美さんのだけかんだん携帯にしとけばよかったと心底後悔した。

続けてメール講座に移ったのだが、一通り手順等を教えた時点で真奈美さんがダウン。テーブルに突っ伏して動かなくなった。ぶすぶすと煙が出ている。あ、なんかぶるぶる震えだした。

「こ、怖い。携帯電話怖い。番号が、ボタンが、アドレスが……あああああ」

……どうやらトラウマを作り出してしまったらしい。携帯、恐ろしい子。

「と、とりあえず今日はここまでにしとこうか。あとはゆっくり休もう」

とはいえ、そろそろ店員さんの目が鋭くなってきたので、もうあまり居座ってられないけど。

……

……

…

「……あの、才悟さん。ひとつ、聞いてもいいでしょうか」

数分間黙って気力回復に努めていた真奈美さんだが、不意に顔を上げて改まったように言った。

「うん？ まあ、いいけど」

「では伺いますが、その……才悟さんは、怒ってらっしゃいますか？」

「ん？ 何に対して？」

「いきなり朝霧家へと連れてこられて、気がついたら養子になっていた、ということについてです」

「……ああ、それね」

俺は少なからず驚きを感じていた。

問いの内容に関してもそうだが、目の前にいる真奈美さんの、その瞳。いつも愛くるしいその目が俺に『真剣』を叩きつけている、その事実。

俺はもう一度真奈美さんが言った言葉を反芻する。

いきなりの真面目な質問。今更感のある話題。

本来なら真っ先に尋ねられてもおかしくないのに、今までまったく触れられなかった話。

どうして今になってそんな話をする気になったのか。

……答えは簡単。彼女がメイドだから。

思い返すと、こうして真奈美さんが俺に対して突っ込んだ質問をするのは初めてのことだった。まあ当然だろう。メイドが必要以上に主人に対して踏み込むことがあまりよろしくないことぐらいは俺にも想像できる。だが、俺は真奈美さんに対してそういう遠慮はなしにしてくれと言った。だからだろう、今その話をするのは。もしかしたら、彼女は俺が朝霧家の養子になったその時から、俺にその質問をぶつけたかったのかもしれない。そして今日この日になって、ようやく俺に胸のモヤモヤをぶちまけた。

それは、つまり。

俺に対して、信頼を寄せてくれたということだろう。

なら、俺としても本音で答えないと。

嘘偽りない、俺の気持ちで。

まあ、ちょっとぐらいシリアスになるさ、俺だって。

「真奈美さんは、俺が怒ってるように見える？」

「あ、いえ……。でも、今回のことはどう考えても急すぎる話でしたから。わたくし達も才悟さんの養子縁組の話进行聞かされたのはほんの数日前の話でして、すぐ戸惑いました。わたし達でさえ戸惑ったのですから、才悟さんの場合はもっと深刻だったと思います」

「まあね」

突然の拉致。朝霧厳重朗との邂逅。借金返済の目処。秋坂才悟の  
終わり。朝霧才悟の始まり。一変した生活。

どれも衝撃的ですがには納得できない内容だ。

「わたくしにも……少し分かるんです。振って湧いた理不尽な話に  
振り回されて、成り行きで流されて自分という存在を変えられて、  
過去の自分が消えていく現実　わたくしなら、怒ります。いえ、  
怒るというより、悲観します。なんで自分がこんな目につて」

「そっか」

俺は俺が出会う前の真奈美さん知らない。

俺が知っている真奈美さんは、俺とそう歳の変わらない女の子で、  
メイドで、ドジだけど一生懸命で、からかうと面白くて、美人で、  
日本刀を持ってて、笛を吹いたらすぐにやってきて……俺は、そん  
な真奈美さんしか知らない。

彼女が過去に何を体験し、何を思ったのか、そんなもの俺は欠片  
も知らない。

今、その真剣な表情の裏で、彼女はどんなことを考えながら、俺  
に向き合っているのだろうか。

「うーん、今回のことは、そうだな……まあ、怒ってはないかな。  
うん、怒ってはないよ。鬱陶しいとは思っただけ」

「そっ…ですか」

「うん、そう。前にも言ったと思うけど、俺は基本的に人を頼るつてのが好きじゃない。孤高主義ってわけじゃないけど、自分出来る範囲でのことなら自分ひとりでやりきりたいと思う。そこへ飛んできたおいしい話。借金にも片がつくし悠々自適の生活送れるし至れり尽くせりだ。それが気に入らない。」

俺は他人に与えられた幸せなんて興味ない。幸せってのは自分自身の手で掴みとるもんだ。こんなあっさり手に入った幸福なんて、正直言えば迷惑だ。俺は墮落した人生を送るつもりはさらさらない」

「……………それじゃあ、才悟さん一人でもなんとかなる」日常生活の世話”をするわたくしも、迷惑ですか…………？」

俺は正直に告げる。

「うん、迷惑」

「」

「好きだけどね」

「え…………」

「最初はどつちかと言うと好かなかった。俺がやるべきことをなんであんたがしてんだよって。でもさ、なんていうか、真奈美さんに世話されると、『ああ、この子は俺のために一生懸命になってくれているんだなあ』って、逆に感動してきちゃってさ。」

真奈美さんって、俺の世話をするを”義務”として考えてないんじゃないかな。ただひたすらに俺のためを思って行動してくれてる。だから俺は君のことが気に入った。俺は他人の助力が嫌いだけど、善意で親切にされるのを嫌うほどひねくれてないよ」



「えっと……あの、それってつまり……」

「よーするに、真奈美さんは特別だってことだよ。情が移ったってのもあるけどね」

照れたのか、真奈美さんは顔を赤くして俯いた。かわいいな、と俺は素直に思えた。

ふと思いついて俺は言ってみた。

「真奈美さんっていつまで朝霧家で働くつもりなの？」

「はい？ えっと、解雇を言い渡されない限りは、ずっと働かせてもらうつもりですけど……」

「そっか。じゃあさ」こっ恥ずかしいなあと思いながら、思い切つて言ってみた。

「将来、俺が自力で稼ぎを出せるようになったら、俺に雇われてよ。それで、本当の意味で俺に、ずっと仕えて欲しいな」

「！」

今以上の高給を出せるか自信ないけどね、と俺は付け加える。

「あ……えと……その……！」

さっき以上に顔を真っ赤にした真奈美さんはあたふたと慌てたが、

次第に俯き、思わずドキツとするぐらいの笑顔で、

「はい」

頷いてくれた。

「ふう、こんなもんかな」

空のダンボールを折りたたんで部屋の隅に置き、ようやく俺は一心地ついた。

「うーん、やはりシニールだな」

買い物を終えて屋敷に帰り、晩飯を食った後にさっそく調度品を並べたのだが、前の俺の部屋の構図と似たように配置したために部屋の中にもうひとつ部屋が出来た風に見える。しかも大半のものが中古で安売りしてたものとかだから元の部屋の豪華と対比してすごい異質な空間を作り出してる。

「まあ、これもおもしろいっちゃおもしろいか」

なにはともあれ俺の部屋が完成した。ちよいと奮発してパソコンなんかも買ったし（しかも最新機種ですよ奥様！　ゼロの波にも負けずがんばりました！）、これからは時間が空いても暇になるってことはないだろう。ふふふ、待ってるよHDD、これから貴様の中身を桃色画像で染め上げてやるぜ！

「とはいえ、ネット環境が整うのはもう少し時間がかかるしな……ふあゝ。今日はもう寝ちまうか」

欠伸をひとつかましてふかふかベッドにダイブ。そのままの太くん並の寝つきのよさを発揮しようとしたのだが、意識が落ちる寸前で携帯のランプに気がついた。

「ん……メール？」

見知らぬメールアドレスだった。よって差出人不明。訝しく思いながらも、とりあえず俺はそれを開いて見た。

イツモアナタノソバニ

「K O E E E E E E E E E E E E E E E E  
E E E E E ! !

その晩、不吉なメールが気になって一睡もできない俺だった……。

今朝になって知ったのだが、アレはどうやら未だに携帯に不慣れな真奈美さんがそれでもがんばって打って送ったものなのか。カタカナじゃなくひらがな、せめて件名欄に真奈美さんの名前があればいい話で終わったはずの残念な結末である。

P・S・

ごめんなさいいけませんでした謝りますだからそれだけはやめてお願いします猫耳スクール水着ランドセルだけは才悟さん才悟様やめてーッッッ！！！

とあるメイドのトラウマ記憶より抜粋

#### 第4話：サイゴはうれしくなると、つい、ヤッちゃうんだ（後書き）

なんだかほとんどテンション高いままで突き進んだ今回のお話。めっちゃ書きやすかった。アドレナリン出まくりですよ。やっぱり才悟は書いてて楽しいです。

今回は天然ドジッ娘メイドであるまなみにスポットを当てたわけですが、魅力が伝わりましたかね。やっぱりこういうかわいさは絵がないとなかなか分らないかな？ 作者脳内での領きシーンはかなりMP高いんですけど。（ちなみにマジックポイントではありません）

次の話はツンデレ義妹であるれいぴょんにスポットが当たることになります。彼女のツンツン具合にMの方は存分に悶えてください。じゃーここいらでプロフィールいつてみようか。

#### 雨宮真奈美

本作のメインヒロインの一人。頭もいいし運動能力も高いがたまに致命的なまでのドジッ娘属性を発揮する。しかしそれさえも魅力のひとつに還元してしまうほどの容姿で、しかも巨乳、メイド、ボインの属性も宿している（大事なことなので二回言いました）。

他にも壊滅的なまでの機械音痴であるという面もある。いつでも他人を気遣える優しさを持つが、怒ると日本刀を取り出すので要注意。用法用量を守ってただしくいたずらしましょう。

特技はお茶淹れ（紅茶・コーヒーなんでもOK）。趣味は織物。座右の銘は「一日一善」

第5話・男が本当に好きなものは二つ

ツンデレと妹である

by ニーチェ

ニーチェファンの人、ごめんなさい。

ある日の昼下がり。

「ねえレイぴよんレイぴよん」

「誰がレイぴよんよ！ 馴れ馴れしく呼ばないでよ！」

「どうしてレイぴよんはひんぬーなんだい？」

「死になさい」

「にょろーん」

ハンマーの洗礼を食らいました。

ある日の朝食。

「おはようございます、お父様。……ついでにうじ虫も」

「はは、真奈美さんうじ虫だってよ」

「ええ！？ わたくしですか！？」



「違うわよ！ まったく朝からむかつくわねえ！ 修司！ 牛乳をもう一杯用意して！」

「はい、お嬢様」

「ねえレイぴょんレイぴょん」

「レイぴょん言うなっ！」

「どうしてレイぴょんはそんな無駄な努力をするんだい？」

「弾け飛びなさい」

「によるーん」

惚れ惚れするぐらいの直撃コースで俺の目ん玉向けてフォークが飛んできた。マジビビッた。真奈美さんが受け止めてくれなかったら俺死んでた。

ある日のティータイム。

「……修司。なんで私がこんな視界に入れるだけで吐き気がするよ  
うな奴と一緒にお茶しないといけないの？」

「はは、真奈美さん見ると吐き気するってよ」

「ええ！？ またわたくしですか！？」

「違つて言つてるでしょうが！ どうして真奈美はそいつの言うことを鵜呑みにするのよ！ 少しは学習しなさい！」

「しゅん……」

「お嬢様、才悟様はあなたの兄君です。それなのに、お二人がお顔を合わせるのには食事のときを除けばたまに廊下ですれ違う程度ではありませんか。それではあまりに寂しすぎます。ですから真奈美さんと相談した結果、これからは定時の度に一緒にお茶をすることにしたのです」

「真奈美……（ギロリ）」

「す、すいません麗菜様！ 出しゃばった真似をしてしまつて……」

「……ふん、まあいいわ。真奈美の淹れるお茶はおいしいから、特別に許してあげる。要はこのゴミを視界に入れなければいいだけよ」

「ねえレイぴょんレイぴょん」

「……………（無視）」

「俺のパンツ履いた感想どうだった？」

「ぶーっ……！」

「お、お嬢様！ 飲み物を吹くなんてなんてはしたない……私は恥ずかしいです」

「げぼげぼ。修司っ、指摘するのはそこじゃないでしょっ！？」

「れ、麗菜様……まさか、麗菜様にそんな趣味があつたなんて……」

「ちーがーうー！ 指摘する箇所はあつてるけど想像するのも身の毛がよだつ誤解が生じてるわよ！ なんで私がこんな奴のぱ、ぱぱはぱパンツなんて履かなきゃいけないのよっ！」

「またまたー。どうせ履く前にくんくん匂いでたんだろー？ 隠すなよー」

「神に祈りを捧げなさい」

「によるーん」

首筋に注がれた紅茶は、とてもお熱うございました。

とまあ、俺達兄妹の毎日は、大体こんな感じ。

父さん、母さん……ぼく、近々そつちに遊びにいくかもしれないよ……。

あ、天の声が

『だが断る』

そつすか。

「妹って、人類の宝だよな」

「は、はい？」

唐突な俺の言葉に、ホワイトボードに文字を書き込んでいた真奈美さんはきょとんとした表情で振り向いた。

「真奈美さん、俺はね、実は結構妹って奴に憧れてたんだよ。ほら、俺って元々一人っ子じゃん？ 親父達も仕事でしょっちゅう家空けてたから、昼間はともかく夜はひとりで遊ばざるを得なかったわけだよ。そんな時に俺は夢想するのさ。かわいい妹が俺の後ろにずっとひつついて、『お兄ちゃん待ってよ』、置いてかないで』とか『お兄ちゃんあの犬さん怖いよ』とか『お兄ちゃんっ、遊んで遊んでっ』とか『お兄ちゃん、お兄ちゃん、わたし大きくなったらお兄ちゃんのお嫁さんになるっ。約束だよっ』とか言っちゃってうふふふふふふふ！

……あれ？　なんで真奈美さんそんな離れたとこにいるの？」

「お、お気になさらずに。で、でも、なんでわざわざそんなこと授

業中に言っんですか？」

「授業中だからこそ、だよ。俺はね、こうした授業中でも、真奈美さんのお喋りを楽しみたいんだよ。教師生徒としての関係だけじゃなく、もっと友好的な関係を築きたいんだよ」

「あ、ありがとうございますっ。才悟さんにそこまで思っていただけで、わたくし、メイド冥利に尽きます！」

さすが真奈美さん。授業時間を潰したいがためについた即興感丸出しの言い訳になんの疑問も抱いていない。この人、振込み詐欺とかに遭ったらほいほい投資しそうだな。

「でも才悟さん、そこまで妹の存在に憧れているのに、どうして麗菜様と喧嘩ばかりしてるんですか？」

「そこなんだよ真奈美さん。俺はね、あいつが俺の妹になると嚴重朗さんから言われたときから、ずっと胸の内に秘めていた言葉があるんだよ」

「な、なんですか？」

「奴は、本物の妹キャラではないっつー!!」

断言した。宣言した。

「解説しよう！ 妹とは、ギリシャ神話に登場する伝説上の生き物である。実際には存在しないとさえ言われているが、希少なサンプルはデータ上に確かに存在しており、そんな存在に兄として慕われ

る人物は神に愛された男として聖人の名を欲しいままにすることが出来ると言われている！

妹の特徴としては、”見た目は大変可愛いく、兄にベツタリ、なんかみんな同じような声な気がする”という、さつき俺が言ったようなエア妹のような感じた。以前は血が繋がっていないのが本当の妹と言われていたが、近年では『義妹？ そんなものは本物の妹ではない！ 妹とは、幼少の頃より片時も離れず過ごした真実の家族であり、一緒に部屋、一緒のご飯、一緒に部屋を持つ、幼馴染キアラでさえ実現できない親密性を有する実妹こそがジャスティスなのだ！』と公言する男もいて、実妹でもなんら問題はないとされている。むしろ俺はこっちを推奨する！

ちなみに、政府が行った全国的なアンケート『姉と妹、欲しいならどっち？』では、熟女その他にしか興味ねえとほざく奴らの意見を排除した結果、実に七割近くが妹と答えている。つまり！ 世の男性の半数以上がっ、伝説上の生き物である妹を欲しているということであるっ！ もし、”ある日突然12人の妹ができ、しかも全員が兄を慕ってくるという立場に立てる権利”というものがあるなら、その覇権を争った世界規模の戦争が勃発するのは想像に難くないだろう……！」

「……………えっと、つまり、要約すると、才悟さんの言う妹はこの世には存在しない、と？」

「違うつ！ リアルワールド 現実世界にはいないだけだっ！ 本物の妹達はっ、常に俺達の心の奥で無邪気に笑ってっ、『お兄ちゃん』『お兄様』『おにいたん』『兄貴』『にいにい』と心穏やかになれる声音で呼ん

でいるものなのだった。そうだろうソウルブラザーっ!!??」

ふらっ

「あれ？ 真奈美さんどうしたの？ 貧血？」

「い、いえ、ちょっと軽く眩暈がただけです……」

「そう？ 体は大切にしてくれよ？ んで、なんで部屋の隅っこにいるわけ？」

「お、お気になさらずに。そ、そう！ お部屋の隅っこが大好きなんですわたくし！」

「なんだそりゃ。変わってるなあ真奈美さん。あははは」

笑う俺に真奈美さんは終始憐れむような視線を向けてきた。なんだろうね？

「そ、それじゃあ才悟さん、才悟さんが麗菜様と喧嘩するのは、麗菜様が才悟さんの言う”妹”ではないからですか？」

「うん？ まあ、その理由がないとは言わないけど……」

「才悟さん、それは少々わがママが過ぎます。この世には人の数ほど価値観があつてですね、その中のひとつである才悟さんの価値観を麗菜様に押し付けるのはさすがにどうかと思います」

べつにそれが大本の理由じゃないんだけどな。まあいいけど。

「でもさあ真奈美さん、さすがにアレはないと思うんだよ俺は。まあね、俺だってそれなりに現実は見てるし、現実世界の妹にそこまでは求めないよ。でもさ、”兄のことをお兄ちゃんと呼ぶ””兄のことを慕う”っていうそれぐらいのことは期待したって罰は当たらないだろ？ それなのに蓋を開けてみれば、口も悪けりゃ性格も悪い。素直じゃねえし、何より胸がない。落胆してちよつとキツく当たるのもしょうがないってもんだろ？」

「最後のは妹がどうではなく才悟さんの個人的趣味だと思うんですが……」

そこはほら、俺っておっぱい星人だし。

「……才悟さん。確かにあなたの言う通り、麗菜様は口も少々悪いかもしれませんし、兄であるあなたを敬うことはしていませんが、それは才悟さんだって同じなんですよ？」

わたくしは伊達さんと違って生まれた頃より麗菜様のことを存じているわけではありませんが、麗菜様は本当はとても優しい方なのです。ですから、いがみ合うことから始めるのではなく、まずは麗菜様を妹として接してあげてください。わたくしはお二人が仲良くしておられるのが一番嬉しいです」

「ふーむ。まあ、努力はしてみるよ」

妹として、ねえ……。

「失礼、少しお邪魔するよ」



「お？ 厳重朗さん？」

珍しい人が俺の部屋に現れた。この人が直接この部屋に来るなんて初めてじゃないだろうか。

「どうしたんですか、こんな朝っぱらから。この時間帯なら仕事に出かけてるはずじゃ？」

厳重朗さんは朝霧グループ当主という地位を裏切らないほど多忙だ。一応朝と夜の食事には顔を出す、それ以外は大抵仕事で外出しているか書斎で書類と格闘しているかだ。いつかは俺があんな立場に立つかもしれないと想像するとそれだけで鳥肌が立つ。

「ああ、その仕事のことなんだけどね。すまないが、真奈美くんを今日一日借りてもいいかね？ どうも今日の仕事は私一人では力バ―しきれなくなりそうでね、彼女の力が必要なんだ」

「はあ。まあ、元々の雇い主は厳重朗さんなんですから、俺がどうこう言う権利はありませんけど、構わないですよ。真奈美さんもいいよな？」

「は、はいもちろんっ！ お供させていただきます、旦那様」

「ありがとう。修司くんに頼んでも良かったんだが、あいにくと今日は出かけていてね。本当に助かる。ああそうだ、誰か代わりのメイドを寄こすように」

「あ、べつにいいですよ」

「そうかい？」

「はい。俺のメイドは、真奈美さんだけっすから。他はいらないです」

「~~~~~っ」

「はは、そうか」

厳重朗さんは爽やかに笑うと、顔の赤い真奈美さんを連れて退出した。かくいう俺も少し顔が熱い。こっ恥ずかー。

「しかし、真奈美さんがいないとなると授業も中止。一気に暇になっちまったなー」

いつかと似たような状況になったが、今の俺にはそれなりに娯楽物があるから退屈はしないか。あー、でもなんかそんな気分でもないなあ。さっきの真奈美さんとの会話のせいでちょっと胸がもやもやしてる。

妹、いもうと、イモウト……。

「……気晴らしに街に遊びに行くか」

誰もお供がないが、まあたまにはひとりもいいだろう。むしろそっちの方が気が楽だし。

「あ、でもよく考えたらあの街って真奈美さんとの買い物を除けば行ったことないなあ。あの時は真奈美さんの案内があったからよかったけど、ひとりで大丈夫かな？」

うーん。ま、俺は別段方向音痴ってわけじゃないし、大丈夫か。

「やつほー。完全に迷ってしもうたぜー」

すんません嘘ついてました。ホントは見知らぬ土地にいくと速攻迷子になっちゃような子なんですばく。ちなみに結構余裕っぽそうに見えるが、口調の不自然さからも伺えるように内心は結構焦ってます。

「まずいな……どうやって帰ろう……」

タクシーでも使おうか。この前蔵重朗さんにもらった資金クレジットカードがあるし。

でも俺、よく考えたらカードの使い方知らない……。

そこっ！ 事実でも俺を貧乏人扱いするなっ！ 手元に現物があったほうが安心するんだから仕方ないだろ！？（ちなみにこの前の買い物の会計はすべて真奈美さん任せでした）

あ、真奈美さんで思い出した。そう言えばちよつと前に、もし外に出るならつて、真奈美さんが小金が入った財布を渡してくれてたっけ。どれどれ。

「OH！」

中身見て速攻閉じた。

ちよつとちよつと！ 諭吉さん十数人は俺のキャパシティを軽く超えてるよ真奈美さん！ ほんの小金だって言ったのに、あれは嘘か！

やべえ、鼻血出そう。で、でもなんだろう？ 一度見てしまつと、もう一度見てしまいたくなる不思議な魔力が……。

開けて。

閉めて。

開けて。

閉めて。

開けて……

「ママー。あのお兄ちゃん変なことしてるー」

「しっ！ 見ちゃいけません！」

HAHAHA！ 泣いてなんかねーよチクショー！

「くそうつ！ こうなったらホントに変なこととしてやるよ！ 選択  
肢力モンッ！！」

1 ・下半身を露出させて街を徘徊する

2 ・んま、っあ、ちょぎ！？（コンドームを天に差し出して）

3 ・全裸で考える人・才悟

4 ・純真無垢そうな子供にエロ本をあげる

「待てい！！ 人生を捨てる気が俺は！？ しかも全部下ネタなん  
て最高の紳士だなこの野郎！！ 特に最後なんて人として終わって  
るぜヒヤッホーッ！！」

その場の勢いでつい不思議な踊りを踊ってやった。交番に連れて  
かれそうになった。今では心の底から反省している。だからパパン  
に電話なんてやめてええええええええええ！！

「すみませんでした。もう二度としません。失礼します。……ほっ。  
危うく前科者になっちまうところだったぜ」

うーむ。

「……はっちゃけた割には、あんまし気分は晴れなかったな」

いつもはこれぐらいバカやればもやもやなんて吹っ飛ぶんだがな  
！。

「ちょっと真剣に考えすぎてんのかな。俺らしくねえ」

ホント、俺らしくねえ。

あの家に厄介になってからというものの、振り回されてばかりだ。  
それがいいことなのか、悪いことなのか、そこはよく分からない  
けど。

「……ん？」

一瞬視界に見知った人物が映って思考が止まった。あれは……修  
司さんか？

「修司さん」

「あ、これは才悟様。どうも。お買い物ですか？ ……おや？ 雨  
宮さんの姿が見えませんが……」

「ああ、人手が足りないって巖重朗さんが連れてったよ。修司さん  
こそどうしたんだ？ 朝から出かけてるって巖重朗さんに聞いたけ  
ど」

「えっ？ え、ええとですね、私は……」

「修司修司っ！」

聞き覚えのある声。修司さんの後ろから……

「ビッグニュースよ修司っ。ずっと探していたベルちゃんの限定ぬいぐるみがこのお店に置いてあるんですってっ！ ああもうなんて幸せなのかしら！ 修司っ、特別に言い値で払って……！」

ピシリ、と、俺の顔を見たロリ娘は全身を硬直させた。

.....

沈默。

俺は何度かぬいぐるみがたくさん置いてある店と口をパクパクさせた口り娘を見比べた後、真っ白になった頭で思わず本音を言った。

「結構かわいい趣味してるな、麗菜」

「~~~~~」

おや？ 雲もないのに頭上に影が……

[illegible]

10セハンマーが、すぐ目の前にありました。

!?

？

(泣)

「才悟様！」

はっ！ 一瞬意識飛んでた！

「うおっ！？ 目の前でハンマーが止まってる！？」

見ると、修司さんが俺に当たる寸前で振り下ろされる麗菜の手を止めてくれたらしい。さすがは修司さん。

「才悟様！？ 大丈夫ですか、お怪我は！？」

「お、おーけーおーけい。モーマンタイ」

足が高速でぶるぶる震えてるのは仕様です。

「離しなさい修司っ！ こ、こんな醜態をこんな奴に見られて……！ もう私が死ぬかこの変態が死ぬしか道は残されてないのよ！」

「なんだよそのめっちゃくちゃな論理展開！？ いいじゃねーかぬいぐるみ見てほくほく間抜け顔をさらしてんのを見たぐらい！ なかなかポイントは高かったですよ！？」

「言つなバカアアアアアアアアアアアッ！！」

いやホント、自分でも何言ってるか分かんねえっす。麗菜とぬいぐるみのセットはそれぐらい衝撃的だった。



ちなみに、暴走した麗菜が鎮圧したのは、それから10分後のことだった。

「なんか、今でも生きた心地とかないんですけど……」

「殺されなかっただけマシだと思いなさい！」

「お嬢様、抑えて抑えて」

「今日見たことはぜーつつつたいに他言無用よ！　いいわね！　バラしたらあんたの戸籍が消滅するわよ！」

これだよまったく。

俺は精神力を、麗菜は体力を急激に消耗したので、ちょっと早めの昼食ということで、俺達は近くのファミレスに入ることになった。前回真奈美さんをファーストフード店へ連れて行って嫌な顔をされたので改善したのだが、それでも麗菜は文句たらたらだった。修司

さんですら苦笑してた。すまん、これ以上高い店は疲弊した今の俺ではとてもじゃないが耐えられないんだ。

「しかし、口も汚ければ性格も悪い、ハンマーは振り回すし、おまけに胸がない麗菜お嬢様が、市販で売ってるようなぬいぐるみに興味津々とはな。世界が震撼したよ」

即座にハンマーを取り出して殴りかかろうとした麗菜だが、あらかじめ目を光らせていた修司さんの手によって阻止される。代わりにキツと俺に睨みをくれた。

「うるさいわねっ！ あ、あれはたまたま……そう！ たまたまなんの興味もないお店に入ったら、哀愁を誘う瞳で私を見つめるベルちゃんが出て、このまま見捨てては朝霧麗菜の名に傷がつくと思って私はベルちゃんを保護しようとしたのよっ！ それだけなんだからっ！」

なんて矛盾だらけな言い訳なんだろう。呆れるどころか感心してしまった。

そついや、よくよく思い返してみれば、前に一度こいつの部屋に偶然入ったとき、視界の隅にぬいぐるみらしきものがあつたような気がしないでもない。あの時はあまりなうふイベントのせいでもうこまで気が回ってなかった。

「……って！ 今さり気なく聞き捨てならない言葉があつたわよっ！ 胸は関係ないでしょ胸はあ！！」

「何言つてんだ、胸が一番重要だろ胸が。この世はボインが正義なんだよ」

「才悟様、さすがにその持論は敵をお作りになるかと……」

「分かってるよ、冗談冗談」

半分本気だったけど。

「まったく！　そもそも、一体全体なんで私が秋坂才悟なんかと席を同じくして昼食を食べないといけないの？　知ってるわよ私。お金のない庶民はレストランなんかの残飯を食べて生活しているんですよ？　あんたもそこら辺のゴミ箱をあさってくればいいのかよ」

「お前は庶民に対して激しい誤解をしている」

……いやまあ、したことはあるけどさ、残飯あさり。

「あのなあ麗菜。今はまだお前は幼いからいいかもしれない。でも成長したらお前だって社会の上に立つ人間になるんだ。上に立てば当然下の人間を動かす必要がある。今の内に下の世界のことを勉強しといった方が将来役に立つぞ」

「子供扱いしないでっ！　あんたなんか言われなくともそれくらい分かってるわよっ！」

「そんなべったん胸で言われても説得力ないな」

「うるちやいつ！」

「ちやいつて……」

「噛んだのよっ!! 悪いっ!？」

「逆ギレかよ!」

「~~~~っ! 修司っ、少し席外すからその内にこのわいせつ人間を排除しておきなさいっ!」

「どこ行くんだよ。トイレか？」

「言っなあー!」

ぷりぷりしながら麗菜はトイレに入ってしまった。せめて注文決めてから行けよ。

「ん? 修司さん、なんで笑ってんの?」

「いえ、お二人とも、ずいぶん仲がよろしいと思ひまして」

真奈美さんと正反対なことを言い出した。

「修司さん、気は確かか? 今のやり取りのどこを見たらそんな感想になるんだよ」

「ただ笑い合えば仲がいい、というわけではないと私は思っております」

「喧嘩するほど仲がいいって言いたいの? そんなんじゃないよ。俺は単に、ああいう態度しか取れないんだよ」

「どういうことですか?」

「俺、妹って奴が分かんねえんだ」

修司さんはキョトンとした顔を見せた。

「分からない、とは？」

「ああ、もちろん言葉の意味は分かってるよ？ 家族の中でどういう位置づけかかっていうのも理解してる。でもさ、俺はそもそも家族って奴が分からない」

「そんな……才悟様には、ちゃんとしたご両親がいたのでしょうか？ それなのに何故……」

「そうなんだけどさあ……家って昔から貧乏だったから、親父もお袋も共働きで、まだ物心がつくかつかないかって年でもひとりでお留守番なんてザラでさ、何日もひとりってこともあったんだよ。そんなわけで、俺は世間一般の家族の触れ合いって奴が致命的なまでに欠けてるんだ。」

だからって、親父達を親と思ってないってわけじゃないんだ。ただ触れ合い方がよく分からない。気まずい雰囲気になったことはないけど、それが世間で言うところの親子としての触れ合いなのか自分でも自信がないんだ。妹なんてなおさらだよ。どんな風に接すればいいのか、分かりやしない。だからあんな態度しか取れないんだよ」

「才悟様……」

「ホント、妹ってなんなんだろうな」

知識としては知っている。

ドラマや漫画なんかで妹キャラなんてしょっちゅう見かける。でもそれは架空のお話。実際に妹のいる友達が言う妹とはなんか違う。分らない。未知の領域だ。そんな奴に、一体どんな態度で接すればいいっていうんだ？ 俺は一体何をすべきなんだよ？

俺は、あいつの兄貴になれるのか？

「不器用、なんですね、才悟様は」

「そうかもね」

修司さんは思案顔になった。

「才悟様。ひとつ、頼みごとをしてもよろしいでしょうか？」

「頼み？ いいけど」

「今日一日、麗菜お嬢様のことをあなたに一任してもよろしいですか？」

「は？」

俺が？ 麗菜を？

「……今のままだと、麗菜を怒らせてばかりになると思うけど？」

「大丈夫ですよ。才悟様は、お嬢様に歩み寄ろうという気持ちはあるのでしょうか？」

「まあ、一応。突然の養子縁組の話とはいえ、書類上は長男ってことになったんだからさ、出来るだけいい兄貴になってやろうと思わなくはないよ」

「なら心配はありません。あまり深く考えず、今まで通り振る舞っていれば、それでいいんだと思います。ただ、ひとつだけ常に胸に留めておいてください」

お嬢様は、あなたより年下の、かわいらしいところのある女の子なんですよ

修司さんは一礼すると、俺の制止を聞かずに店から出て行った。

「面倒なことになったなあ」

ホントに大丈夫なんだろうな、修司さん。

しばらくして、麗菜がトイレから戻ってきた。

「……なんであんたがまだここにいるのよ」

「いちゃ悪いか」

「悪いわよ。まったく、修司は何をしてるのかしら！」

「修司さんなら職務放棄して先帰ったぞ」

「はあっ！？　ちょ、嘘でしょ！？」

「マジ。なんかお前のことを任された」

「……クロス」

おや？　なんだか背筋が震えちゃったぞ？

「もういい。帰る」

溜息をついた麗菜はくるりと踵を返しやがった。だが、面倒なことはいえ、これから一緒に暮らしていく以上はそれなりの関係を築きたいと思う（ちよつと癪だが）ので、ここで引き下がるわけにはいかない。

「おいおいそりやないだろ。せっかく街に出てきたんだから、もっと楽しんでから帰ろっぜ」

「異臭がするから近寄らないで」



「異臭ってなんだよ!? 風呂には毎日入ってる!」

「いくら洗い流しても貧乏臭さは抜けきってないわよ。大体服装からして貧乏臭いわ。何よその気品の欠片もない安っぽい服は」

「デメエユニ 口を舐めんじゃねえっ!!」

仕方ないだろ! 屋敷から支給された普段着は上品過ぎて着るのが勿体無いんだよ!

「つかさあ、よく考えたら、俺がこいつの兄貴になる努力をしようにも、こいつが俺を嫌ってるんだったら意味がないような気がするんだけど。まあ、どっちかが歩み寄らなきゃ始まらないってことは分かるんだけどさ。納得いかね!」

「とりあえず、もうメニューも注文しちまったんだから、帰るならせめて食ってからにしろ」

「待ちなさいよ! 私は頼んだ覚えはないわよ!?!」

「お前の分も俺が頼んどいた」

「何を勝手に」

「まあまあ、お前なら絶対気に入る奴だから」

なんて話していると、グッドタイミングで店員さんが料理を運んできた。

「お、うまそー」

俺が頼んだのはハンバーグセット。鉄板で焼ける音と匂いが俺の胃を刺激する。さっそく俺は一口。はふはふ。うまー。

「……秋坂才悟、どういうことよ、これ」

「んーどうしたー？ 冷めない内にお前も食べよー」

「食べるかバカ！ 一体なんなのよこれ！？」

「え、知らねえの？ これはな、特製お子様ランチって言うんだぞ。オムライスに刺さった旗がチャーミングだろ？」

ちなみにいうと俺が子供の頃の誕生日と言えばこれだった。今思い返すと、なんて安い誕生日プレゼントだったのだろうか。値段も知らずにはしゃいでいたのが懐かしい。

「お子様ランチー！？ それって子供が食べるものじゃない！ あんたどこまで私をバカにすれば気が済むのよ！ こんなもの食べないわよ私！」

「このお子様ランチはそんなバカにしたものでもないぜ。量は少ないけど味はなかなかだ。それに、ぜんぶ食べなきゃ付属のおもちやがもらえないぞ」

「バカにして！ この私がおもちやなんか釣られると なっ！」

ピシャー、と電撃が走ったかのように衝撃を受ける麗菜。

「こ、こここここれっ、ベルちゃん人形！？」

「ああ、そんな名前だったっけ。確か、ここのファミレスってそのキャラクターのグッズ作ってる会社と同じ系列で、よく試作品がおまけについてくるんだよ。俺も昔はおまけ集めてたなあ」

今とは違うキャラクターだったけどな。

「で？ どうする？ お子様ランチ全部平らげるようなよい子じゃないとそのおまけはもらえませんよー…… ってもう食い始めてやる！？」

すげえ、人形見た瞬間態度を翻しやがった。すごい勢いでランチが消えていく。

「ご馳走様！」

「はやっ！」

かかった時間わずか3分。カップ麺もびつくりの早さだ。

「秋坂才悟っ！」

「な、何だよ」

「これっ、この人形っ、バリエーションはいくつあるの！？」

「え、えーと確か、4種＋シークレット1種だったかな」

「ちょっとそこのあなたっ！ 特製お子様ランチ5人前持ってきて来っ！ 大至急っ！」

「か、かしこまりました」

「うおおい!？」

こいつ、まさかたった一回の来店で全種コンプリートする気が！  
？ マニアってレベルじゃねーぞ!!

「お待たせしましたー。特製お子様ランチで」

店員さんが言い切る前に既に麗菜はフォークを手にしていた。一瞬の油断が命取り そんな狩人の瞳をぎらつかせ、皿がテーブルに置かれた瞬間にはウインナーが一個消えていた。あるえー。

「……やべえ。ちょっと予想GUY過ぎてボケもツツコミもできねえ」

俺はしばらく呆れながら麗菜を見ていたが なんつーか、次第に頬が緩んでいくのを抑えられなくなっていった。

「はぐっ、んくっ、おいしいっ、おいしいっ!」

まるで小さな子供のようにフォークを握っておいしそうにランチを食べる麗菜。不覚にも、かわいいと思ってしまった。胸の奥がぽわぽわと暖かくなって、とても優しい気持ちになってくる。

「おい麗菜。ほっぺにご飯粒ついてるぞ」

「ベルちゃんっ、ベルちゃんっ、ベルちゃんっ」

「聞いちゃいねえ」

しょうがないからご飯粒を取ってやると、

「ありがとっ」

などと素直に礼を言われて、なんだか俺の方が恥ずかしくなってきた。

なんだこれ。なんですかこれ。なーんなーんでーすかー。

「……ホント、振り回されてるなー俺」

それがいいことなのか、悪いことなのか、よくわからない。

でも、楽しいと感じている自分は、確かにいた。

「うざい、きもい、臭い。もっと離れなさいよ」

店を出ての開口一番がそれでした。

「うつ、うつ……。バカだった……。ちょっといい雰囲気だなーとか  
思った俺がバカだった……」

「何泣いてんの？ きも……」

「うん、ごめんね、きもくて。生まれてきてすいませんですよね。  
えぐえぐ」

くそう、デレたあとのツンがここまで辛いとは思わなかったよ……。

しかし、やはり機嫌はいい方なのか、麗菜は戦利品を抱えてニコ  
ニコしている。笑ってれば普通にかわいんだけどな。

「それで？ これからどこへ行くの？」

「は？」

「何気の抜けた声出してるのよ。これから街を回るんでしょ。さっ  
さとエスコートしなさい」

「……………いいのか？」

突然の心変わりにちよつと戸惑う。

「何よ、まさかこの私と連れだって歩くのが不満だとも言つもの？」

「いや、まあ、そっちがいいんならいいんだけどさ」

どうやらホントに機嫌いいらしい。

「ていうか、俺がエスコートするのかよ」

「だって私、午後の予定なんて特に考えてなかったもの。それに、貧乏庶民のあんたがどんなエスコートをするか興味あるわ」

「いきなりそんなこと言われてもな……」

そもそも俺はこの地理に疎いからエスコートもクソもないんだが。何より、彼女とデートしたことなんてないから女の子連れてどこ行っっていいか分かんない。ち、違う出会いがなか（以下略）

まあ、友達と遊ぶ感覚でいつか。

つーわけでやって来たゲーセン。

「……あんた、バカじゃないの？」

「うぐっ」

「一体どんな所へ連れて行ってくれるのかと思ったら、こんなうるさくてタバコ臭いところに連れてきて。なに？ あんた私を怒らせたいわけ？ 死ねば？ いっぺん死んでみれば？」

初っ端から罵倒の嵐だった

「げ、ゲーセンをバカにするな。そもそもお前ゲーセンがなんたる

ものか知ってんのかよ？」

「ふん、それぐらい知ってるわよ。”ドキュン”とかいう連中がコインをめぐって血沸き肉踊る決闘を行うコロセウムでしょ？」

「デメエ庶民に喧嘩売ってんのか」

本当にこいつは今までどんな教育を施されたのだろうか。今度修司さんを問い詰めよう。

「しょうがない、俺がお前に庶民の遊びというものを教えてやる」

手始めにエアホッケーで対戦してみることにした。

「え、えっと、これで打てばいいんでしょう？ 楽勝よ」

おずおずとパックを弾く麗菜。

「そおい！」

全力で弾き返す俺。パックは寸分変わらずゴールに突き刺さった。

「はあっ！？ な、何よ今の！ 卑怯よ！」

「おいおい初めにルールは説明しただろ？ このゲームは気を抜けば終わりなんだよ。まったくこれだから危機感のないお嬢様は……」

「かつちーん！ 調子に乗って……！ 勝負はまだこれからよ！」



ええい！」

「ほいっと」

力任せに打たれた計算も何もないパックを弾き返す。二点目ゲツト。

「ちよつとっ！ 私は素人なのよ！？ 少しは手加減しようとか思わないの！？」

「ほー。普段からあれだけ大言壮語してる麗菜様はその程度のハンデで勝負を諦めるのか」

「ぐぐっ」

「はっ、所詮はただのつるぺただったということか」

ぶちん、と音がした気がした。

「？ っておまつ！」

「でえいつ！」

何をとち狂ったか、麗菜はパックを手に取り空中スマッシュをこましやがった。

しかも標的は我がイケメンフェイス（意味が重複してるのは仕様だよ）。

「ちよ、あぶねえ！？ お前マジで空中ホッケーすんなよ！？」

「何かわしてんのよ！　ちゃんと顔で弾き返しなさいよっ！」

「言ってることがめちゃくちゃだ！」

俺達は偶然通りかかった店員さんに嚴重注意をくらった。当たり前だ。結局エアホッケーは断念することに。

「おーけー。さっきのは確かに俺も大人気なかった。そもそも勝負形式を取ったのが間違いだったんだ。ここは一人プレイを楽しもう」というわけでモグラ叩きをすることに。これなら簡単だから麗菜もキレないだろ。

手始めに俺がやってみる。

「よっ、ほっ、と。お、本日最高の点数だ」

「ちっ。マグレの癖に調子に乗って」

こいつマジむかつくんだが。

「退きなさい。この朝霧麗菜があんたの記録を軽く超えてあげるわ」

やれやれ、とジェスチャーする俺。昔はゲーセン荒らしの才ちゃんと恐れられたこの俺の記録がそう簡単に塗り替えられるわけが

ガッシャーンッ！！

「あれ？ これ動かなくなっただわよ？ 故障したんじゃないの？」

「……そりゃ自慢の10tハンマーで殴られたらモグラも引きこもりたくなるわ」

ツッコむのもバカらしくなるぐらいマシンを粉碎してくれた麗菜に溜息しか出ない。またしても店員さんに嚴重注意をくらった。青くなった顔を見て本当に申し訳ない気持ちになりましたよ。

「おーけいおーけい。俺がバカだった。そもそもお前に道具を扱うゲームをさせようとしたのが間違いだっただ。お前は今後一切何も使っな。ハンマーも禁止」

つーわけで道具を使わなくていいUFOキャッチャーをやることに。予想通りぬいぐるみ達に囲まれてご満悦の麗菜。これなら暴動も起きまい。

「わあー！ ねえっ、これどうやってぬいぐるみ取るの？ 早く教えなさいよっ」

ホンツットにこいつはぬいぐるみを前にすると人格が変わるらしい。なんとなくこいつの扱い方が分かった気がする。

「それっ、そこっ。……ううう、取ーれーなーいー！ これ取れないように細工されてるんじゃないかしら！ ちよっと秋坂才悟！ これなんでこんなに難し」

「ん？ 何か言ったか？」

ちょうど俺は4つ目の戦利品を取り出しているところだったのでよく聞こえなかった。振り返ると、麗菜は俺の取ったぬいぐるみを見てピクピクとこめかみを痙攣させていた。あ、なんか嫌な予感。

「うにゃーっ！！　なんで秋坂才悟にできて私にできにゃいのよーっ！！」

「なぜ猫語！？」

なんてツツコンでる隙に麗菜は奇声を上げながらボックスを力いっぱいゆすり始めた。全国のクレーンゲーマーが怒り狂いそうな所業である。もうやだこの子。

当然のことながら再三嚴重注意をくらった。というか「もう帰ってくださいお願いします」と泣きつかれた。名も知れぬ店員にここまで申し訳ないと思ったのは人生初でした。

………

………

…

そんなわけで、店を追い出されてしまった俺達。

……絶対怒ってるよなー、こいつ。

「さ、さて、次はどこへ行きましょうかおぜうさん？」

またハンマーが飛んでくるのかとびくびくしながら振り向くと、意外にも麗菜は沈んでいた。それも拗ねている類だ。

「何よ何よ……私は朝霧麗菜なのよ。なんでもできるんだから。初めてやることだって器用にこなしちゃうんだから。負けてないんだから……」

泣き言みたいに麗菜は呟く。まるで迷子の子供のようだった。放っておいたら、すぐにでも泣き出してしまいそうな気がした。

ふと、修司さんの言葉がよみがえる。

お嬢様は、あなたより年下の、かわいらしいところのある女の子なんですよ

「……ああ、はいはい。なるほどね」

少し。

少しだけだけ。

分かった気がするよ、修司さん。

「……はあ。しょうがねえなあ。ほら、俺が取ったぬいぐるみやるから元気出せ」

「えっ。い、いいの!?!」

「うん、いい」

「わぁー！」

さっきまでの消沈ぶりが嘘みたいになぬいぐるみを抱えてきやつきやつとはしゃぐ麗菜。単純な奴だ　なんて思ってた見たら、きつと睨みをくれた。くわばらくわばら、と口笛を吹いて誤魔化しながらそっぽを向く。

「あ、ありがと……」

「え？」

啞然として振り向くと、既に麗菜は俺に背を向けていた。聞き間違ひ……？　でも、なんか少し頬が赤くなってるような……。

「あつ。こんなところに新しくぬいぐるみショップができてる！」

すったかと走っていく麗菜。……まさかなあ？　そんなはずないよなあ？

「才悟様、早く追いかけないと置いていかれますよ」

「あ、修司さん」

いつの間にか後ろには修司さんが立っていた。

「おや、あまり驚いてくれませんか。……もしかして、気づいておられましたか？」

「いんや。声かけられるまで後ろに立つてることすら知らなかった。でも、修司さんのことだから、なんだかんだ言っても麗菜から目は離さないだろうと思ってたから」

「あはは、見事に見抜かれてしまいましたね」

まあ、正直に言うといきなり声をかけられたのはちょっとビビッただけだね。

「それで、どうでしたか、才悟様。麗菜お嬢様と一緒にいられて」

「うん？ そうだなー……一言で言つと、生意気だな」

「ただの生意気ですか？」

「いや、ちょっとかわいい生意気」

「そうですか」

柔和な笑みを浮かべる修司さん。その微笑みが普段の三割増になつているのは俺の気のせいではないだろう。

「ありがとね、修司さん」

「はい？」

「なんか、胸のもやもやが晴れた。まだ兄と妹って奴はよく分からないけど、取っ掛かりは掴めた気がする」

「お役に立てたのなら、光栄です。これから、お嬢様と仲良くしてあげてください」

「ま、善処するよ」

「はい」

「秋坂才悟ー！ 何ぼさつとしてるのよ、早く来なさーいつ」

遠くで麗菜がぶんぶん手を振っている。どうやら死角になっているせいで修司さんには気づいてないらしい。

「ほら、呼んでますよ」

「修司さんは行かないの？」

「今行ったら間違いなく怒鳴られますので、戦略的撤退をします」

「いい判断だな。逃げるのは恥ずべきことじゃない」

「恐れ入ります」

修司さんは一礼すると音もなく消え去った。真奈美さんといい修司さんといい、常識はずれもいいところだ。

「コラッ！ 聞こえてるのー！？ 早くしないと置いてくわよー」

「へいへい」



やれやれ、という仕草をして、ハンマー振り回されるのは御免なので朝霧家の暴君へと駆け出す。文句をぐちぐち言いながら。

その時俺の顔に張り付いていたのは、たぶん”笑顔”って奴だったと思う。

後日談というか、今回のオチ。

それはある日の朝のことだった。

「……真奈美さん。俺、勉強のし過ぎで目がバカになったのかな。ぐるぐる巻きにされた修司さんがベランダに吊るされてるように見えるんだけど」

「……たぶん、錯覚じゃないと思います」

「ですよー」

傍に立ってる麗菜が「よくも私を置いて」とか「私の秘密も守れ

ずに」とかすんげえ勢いで怒鳴ってる。戦略的撤退は無意味だったか。南無。

しかし、あれほどの危機に立たされながら修司さんは苦笑いするだけだった。結構余裕っぽい。麗菜もそれを見てとったか、懷からハンマーとは違うものを取り出した。

「もうひとついいかな、真奈美さん」

「なんですか？」

「麗菜が持つてるのって、ハサミだよな」

「ですねえ。縄ぐらいばっさり切れそうですねえ」

珍しく修司さんは本気であわてた声を上げた。「お嬢様さすがにそれは」とか「命はひとつしかないんですよ」とかかなり必死な説得を試みてる。

と、修司さんが離れたところに立っている俺達に気づいた。口をパクパクさせている。

タ・ス・ケ・テ

俺も口パクで返した。

コ・ノ・ミ・ノ・バ・ス・ト・ハ？

「どんな返事ですかああああああああああああっ  
っ！！」

だって興味あったんだもん。

「じゃ、行こうか真奈美さん」

「えっ！？ 助けなくていいんですか！？」

「分かってないなあ真奈美さん。昔からよく言うだろ、トラは我が子を千尋の谷へ突き落とすって」

「なるほど、さすが才悟さんですね！」

「だろー？」

俺達はすったかと歩み去ることにした。

数秒後。

アッ

ツツツ!!!

この日、俺達は大切な何かを失った……。

P・S・

次の日の朝食。

ぴんぴんした修司さんが現れてコーヒー吹いちゃったのは俺とキミだけの秘密だよ？

前回に比べると後半がやや失速気味の今回。ちょっと書くのほったらかしにして続き書くとテンション合わせるの大変なんですよねー。さて、予告通り今回の主役はレイぴよんですが……やべえ、死ぬ（笑）。

新キャラとかの構成もいろいろ練ってるんですが、それを含めてもこの子は作者の中では「キズナ！」中最高のかわいさを誇っています。別に作者に妹属性があるわけではないです。むしろぼくはあん（以下略）

さて、戯言はここまでにして紹介でもしましょうか。

### 朝霧麗菜

世界でも指折りの大企業・朝霧グループの御令嬢。朝霧家の娘であるという自負のため常に上に立っていないと気がすまない。典型的な負けず嫌い。一部を除き常に人を突き放すような物言いをするが、ぬいぐるみなどのかわいらしいものが大好きという一面がある。それなんてツンデレ？

あまり他人との会話をしないためか、慌てたり怒ったりすると、台詞を奇跡的なまでに囁んだりすることがある。その折猫語へと派生する場合があり、一部では彼女こそ伝説のツンネコ様ではないかと囁かれているが、真相は定かではない。

特技はデストロイ。趣味はぬいぐるみ集め。座右の銘は「天下無敵」

第6話：新キャラは巨乳？　ずっと俺のターン！（前書き）

タイトルの通り、新キャラが出ます。

第6話：新キャラは巨乳？　ずっと俺のターン！

ぷりぷりぷり〜

「はー、至福の時だわー」

あ、どうも、朝霧才悟です。今トイレに入ってます。『大』です。いきなり下品ですみません。ほんとすいません。謝りますから「ぶりぶり左衛門」とか「うんこマン」とかいう呼称はやめてくださいね。軽く引きこめますから。

「ふー、すっきりした。では、仕上げに世界最高峰と謳われる日本便器の真骨頂を見せてもらおうか」

”おしり”ボタン、スイッチオン。

「こちらサイゴ、目標<sup>ケツ</sup>を狙い打つぜ！……はふんっ」

おうつ、おおうつ、おーうつ！

「……ほぼイキかけました……」

俺、日本に生まれてよかった。ほんと。

「さて、おしりも洗ったし、あとは紙でふきふきと……よし、じゃあ部屋にもどる」

ぶるぶるぶる

「……おや！？ おしりのようすが……！」

やばい、またしたくなった。仕方なくもう一度座る。

「ふう。えーとおしりと……あはんっ」

これでよし。じゃあ今度こそ部屋に

ぶるぶるぶる

⌋  
⋮  
⌋

座る。する。噴射。拭く。立つ。

ぶるぶるぶる

.....

## 無限ループ？

「いやあああああ！ トイレに搾りとられちゃううううううう」

「！！！」

座るつ。するつ。噴射つ。拭くつ。立つつ。座る！する！噴射！拭く！立つ！座る？する？噴射？拭く？立つ？





全力で真奈美さんを追いかけているが、何故か俺は今までにない爽やかさを感じていた。まるで俺自身が風になったのではないかという感覚。走れば走るほどすがすがしい気持ちになり、それと同時に得も知れぬ高揚感が俺を包み込む。そしてこの股間の爽快感。何故だろうか。もうひとつ言うなら、周りからやけに叫び声がするのはどうしてなのだろうか。一体何故

ッ！

気がついたらぐるぐる巻きで吊るされてました。

「違うよ俺は変態じゃないよ。俺はただ、おしりを拭くための紙が欲しかっただけだよ。変態じゃないよ。仮に変態だとしても、変態という名の紳士だよ！　ちよっ、待て麗菜！　とりあえずそのハンマーをしまえ！　この状態でそれを食らえばマジで命が危うい！」

「死にいいにいいいいさあああああせええええええっ！」

「ちよ、やめ、やめっ、やめ

ッ！！??」

見事なスイングだったよ、麗菜。でもひとつだけ見落とししていることがある。

しよせん俺も、温かい水の出る便器に踊らされた、愚かな犠牲者のひとりだったってことをさ

その日、僕は死んだはずの両親と再会した。

季節は春。

桜が舞い、出会いと別れが無数に繰り広げられ、恋が溢れ、憎きスギ花粉が空中散布され、浮かれた中二どもが妄想を爆発させ、”  
ぜんらのへんたいしんし” 裸で何が悪い！ が現れるような、  
愉快で奇妙な季節。

そんな楽しい季節の最中 俺は世界一長い二十分を体験していた。

「……」

「……」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「いつそ殺してくれ。」

そんなことを思わずにはいられないシチュエーションである。

原因は今俺が乗っている無駄に豪華な外車を運転している男。

名前はヤマさん。

どっからどう見ても893な人だった。

「才悟さん？ どうしたんですか？ いつになく静かですね。ま、まさかお体が優れないのでは……！」

「ダイジョウブ、ヘイキダヨ」

「いかん、恐怖のあまり片言になっている。」

「てゆうか、助手席に座ってる真奈美さんはなんで平気なんだ。あれか、得意の天然パワーがこの893オーラを緩和しているのか。すごいぞ天然。年中脳内お花畑は格が違うな！ とっても失礼な物」

言いである。

いやね、みなさん知っての通り、俺は一般の人と違ってやーさんとは切っても切れない（切らせてくれない）関係にあったんでね、強面のおっさんとかは比較的見慣れてるわけですよ。だがこのおっさんは違う。今まで俺が見てきた奴らとは比べ物にならない。そう、言うなればスーパー YAKUZAである。

しかもこのおっちゃん、俺達が車に乗ってから一言も喋らないし、ちらちらとバックミラー越しに俺の方を見てくるから恐いの何の。冷や汗のかき過ぎで脱水症状を起こしかねない勢いである。なるほど、通りで麗菜がわざわざ別の車を用意させたわけだ。お兄ちゃんと一緒に車に乗るのが嫌だったんじゃないんだね！

……だよね？　だよね？

なんて油断していると、

ギロリ

。

おっと、どうやら今の一睨みで軽く気絶しちゃったようだぜ（ちなみに3回目）。

まったくもって、どうして巖重朗さんはこんな人を雇ったんだろ

うか……。

「あ、才悟さん見てください！ 見えてきましたよ！」

いつそHARAKIRIでもしてやろうかと精神的にやばくなつて来たとき、救いの声が俺の生気を呼び起こした。

「や、やつと着いた……！」

3年は寿命が縮まった体に鞭打ち、窓の外に広がる景色を見る。

7

L

おっと、違う意味で意識が飛びかけたぜ。

「……あの、真奈美さん？ ホントにあれ？」

「はい。あれこそ才悟さんがこの春から通うことになる、神楽坂学園です」

[illegible]

神楽坂学園。

将来の日本を担う、経済界の御曹司やお嬢様が多数在籍している  
超お金持ち学園。

俺の新しい学園生活が、ここで始まる 予定。

話は数日前にさかのぼる。

「……は？ 転校？」

ある日の夕食。いつも通り頬が落ちそうなほど美味しい飯を食べているとき、その話はやってきた。

「そう、転校だ。才悟くんには今年から麗菜も通うことになっている学園に転入してもらうことになる」

「ええっ！？ 本当ですかお父様！？」

「……なんで俺より先にお前が驚くんだよ」

「冗談じゃないわっ！ 屋敷での生活を共にするだけでも苦痛なのに、その学園生活にまでこの豚がずかずかと入り込んでくるなんてっ！ お父様、私にストレスで死ねと仰るんですか！？」

「……なんだろうね。最近は罵倒されるのに慣れたせいかな、この程度じゃ怒る気もしたくなってきたよ。これも成長かな、真奈美さん」

「さ、さあ、どうなんでしょう？」

しかし、いきなり転校と来たか。相変わらず巖重朗さんは前置きなく俺に衝撃的イベントを持ってくるな。

「で、巖重朗さん。なんで転校なんて話が出たんすか？ 俺が今まで通ってきた学校じゃダメなんすか？」

「必ずしもダメ、というわけではないが、私としてはやはりよりよい環境を君に提供したいのだよ。……もしや、転校はいやかい？ 何か今の学校に強い思い入れでもあるのかい？」

「いや、そういうのは特にないんすけど……」

別に転校自体に問題があるわけじゃない。

「ただ、俺の知らないところで勝手に話が進められていたってのが、ちよつと気に入らないだけです」

「秋坂才悟！ あんたまさか、お父様がわざわざ取り計らってくれた懇意を跳ね除ける気！？ そんなことしたら私がただじゃおかな…… ああでもそれを認めると春からこいつと同じ学園に通うことに……！」

麗菜はうるさく怒鳴ってるだけなので放置することにした。

「確かに、何の相談もなしに話を進めてしまったことは申し訳ないと思っている。だが、これもすべて君のためを思っていることなんだ。分かってほしい」



「まあ、いいんすけどね。俺も神楽坂には興味あるし」

この辺の地域に住む者であの学園を知らない者はいない。ていうか、国民の大半がその存在を知っている。

神楽坂学園つてのは一言で言えばお金持ち学校だ。ただし頭に『超』がつく。度々テレビにも登場するのだが、俺が初めてその学校のニュースを見たときの感想が「え？　これどこ？　外国の観光地？」だった。そんなことを思わせるようなすごい光景がテレビの奥で広がっていた。

まず敷地の広さからして格が違う。聞いた話では当時農地が多かった市を丸ごと買い取って校舎や施設を建てたらしい。これだけでも眼球飛び出しものだが、その敷地内に建てられているのは校舎や体育館などの一般的な学校設備だけでなく、バカみたいに多くの施設やグラウンド、果ては馬の牧場なんてのも設置されてる始末。もはや校舎がおまけになりそうな勢いである。しかも大半の施設が国内外問わず有名な建築デザイナー達による合作で、空から見た全体像は壮観の一言につきる国宝級ものである。ていうか去年国宝指定された。

ちなみに、神楽坂学園に入学するには面倒な手続きなどもあるが、そこまで大した学力がなくても試験は通るらしい。ただ、問題は学費だ。聞いた話によると、入学金だけでも『ピー』円は軽く必要らしい。正確な値段を口にすると俺の脳みそがショートしてしまうので割愛するが、まあ、そんだけありや一生働かんでもいいだろだけ言っておこう。要は金さえありや誰でも入れるのだ。

つまるところ、神楽坂学園とは我らが日本国の土地というより、

異世界と言った方がしっくりくるような所なのだ。そんな庶民の憧れみたいなあの神楽坂に行けるいうのだから、俺としては拒む理由はない。

まあそんなわけで。

厳重朗さんの話を概ね了承した俺は簡単に転入試験を受け（ペーパーだけなので屋敷で受けた）、無事入学手続きも済ませたので、入学前に一回ぐらい下見に行こうと思いい立ち現在に至るわけである。

「しかしまあ、想像以上にすげえとこだな」

校門周辺の警備の厳重さにも驚いたが、何よりも驚いたのは学園内をバスが走っていたことだ。なんでも敷地が広すぎるため専用バスが園内を巡回しているとのこと。もうなんでもありの世界である。

「へー、なかなかいい所じゃない。気に入ったわ。さすがは私が目をつけた学園なだけはあるわね」

一緒に下見に来た麗菜はさすがに最初は少し驚いていたようだが、今ではすっかり馴染んでいる。さすが腐っても朝霧家の人間、こういう常識外れの場所での適応能力が高い。

ぶんっ

「うおっ！？ テメエいきなりハンマー振り回すなよ！？」

「あんた今、私に対して失礼なこと考えたでしょ？」

「バカ言え、貧乳でチビでロリで世間知らずのクソ生意気な麗菜もさすがは腐っても朝霧家の人間なんだと褒めちぎっていただハンマークラツシュツ!？」

「死ね！ 今すぐ死ね！ 恐るべき勢いで死にさらせっ！」

「死ぬ！ 当たったら今すぐ死ぬ！ 恐るべき勢いで死にさらすっ！」

なんてギャーギャー騒ぎ立てる俺達。うーむ、この前の一件で少しは仲良くなれたと思ったんだがなあ。それにしても、やけに勘のいい奴である。

「ううー！ ふたりともやめてください！ せっかくみなさんでお出かけしたんですから、もっと仲良くしてくださいよう！」

「はは、いいじゃないですか雨宮さん。会話がないよりはよっぽど楽しいですよ。特に私が」

「もー！ 伊達さんも伊達さんです！ どうしてそんなに樂觀できるんですか!？」

「雨宮さん。人生を楽しく生きるコツは、投げやりになることですよ」

「投げやりにならないでください〜〜〜〜！」

俺達のお供であるメイド・執事コンビは揃っていつも通りの反応。相変わらず真奈美さんは気苦労が多そうだ。まったく誰だよ俺のま

なみんを困らせてる奴は。

「ふんっ！ 言っとくけどね！ 私はあんたがここに入ることになんて納得してないんだから！ 秋坂才悟ごときがこの学園で過ごすなんて1兆年は早いだよ！」

「んなこと言われてもなあ。俺もうこの生徒手帳もらったしどうにもできないと思うけどな。っーか、あれほど厳重朗さんに言われてまだ納得してなかったのかお前」

「ふきーっ！ 大体お父様は優しすぎるのよ！ こんなどこの馬の骨ともしらない男を養子にするだけならまだしも、負債を帳消しにした上に学業の面倒まで見るなんて！ あんた、ちょっとは遠慮しようとか思わなかったの！？」

「あ、見て真奈美さん。通り一面に桜が咲いてるよ」

「わあ、綺麗。もうすっかり春ですねえ」

「ホント綺麗だ。もちろん、真奈美さんの方が綺麗だけどね」

「も、もう、才悟さんったら……！」

「聞けっ……！」

こいつも相変わらず無駄に元気だなあ。いっつもこんなテンションで疲れないのかねえ。

「しかし、おもしろいぐらい人がいねえな。ここまで回って出会ったのがガードマンだけってどうよ？」

「仕様がありませんよ才悟様。もともとこの敷地は広い上に、今はちょうど長期休暇ですから、生徒の大半はご両親と共に海外へバカンスに行ってるでしょうし」

さて、今さらつと聞きなれない春休みの過ごし方が聞こえたぞ。

「実際に生徒の方をご覧になりたいなら、校舎の中に入ってはどうか？ 校舎内ならば、何人かは登校している生徒もいると思いますが」

「そうだな。それじゃ他の施設は後回しにして……ってあれ？ 麗菜は？」

「お嬢様ならあちらに」

修司さんが指差した方を見える。

麗菜はたくさんのペンギン達と戯れていた。

「待てやおい！ なんだよこのツッコミどころしかない光景は！？」

「わあ、かわいい。麗菜様、わたくしも混ざっていいですかー？」

「ギャグか！？ その反応はギャグなのか！？ ていうかギャグだと言つてよまなみん！」

「おや、才悟様はボケてくれる方が欲しいのですか？ では僭越な

がら私が……」

「違い！ てかあんたの場合は絶対わざとだろコラ！」

ふう……久しぶりに熱くツッコんじまったぜ。しかしさすがは神楽坂、学内にペンギンまでも徘徊しているとは。いつそテーマパークとして一般公開した方がいいのではないだろうか。

それはさておき……

「ペンペン ペンペン お姉ちゃんとおっそびつましょっ」

天使 麗菜降臨。

どうやらぬいぐるみでなくともかわいいものを前にするとモードチェンジするらしい。ずっとそのままできると切に訴えたい。

「にしても、麗菜も案外お子様だな。ペンギン程度で腰砕きになるとは」

「いいじゃないですか。とてもかわいらしいです、麗菜様」

「はっ、いくらかわいくとも貧乳なら意味がないのさ。そもそも団体行動において勝手な行動をするなんてまず人として間違っ……」

と、その時何気なく俺は視線を宙に向けた。

そこには空飛ぶ

\$ \$ \$

「ふおおおおおおおおお！ 諭吉iiiiiiiiiiii  
iiiiiiiiiiiiiiiiiiiっ！！」

「ああ！ 才悟さんが風に飛ばされている一万円札を追いかけて行きましたよ！？」

「ははは、ましてもパーティが一人減ってしまいましたねえ」

「の、のんきなこと言ってる場合じゃないですよ！ 才悟さんっ、才悟さんっ！」

「読者の期待を裏切らない男、俺！」

はい、というわけでまたまた迷子になった才悟っちです。なんだろうね、見知らぬところにきたら必ず迷子になるってのが俺のクオリティなんだろうかね。

「しかし、こりやまずいぞ。あんまりのんきなこと言ってる場合じゃないやねえ……」

予備知識から既に分かっていたことだが、この神楽坂学園は想像以上に広い。市全体を買い取ったなんてただの誇張表現だと思ってたがそうでもないらしい。こりや元いた場所に帰るだけでも相当骨が折れそうだ。

幸い学内は専用バスが走っているのでそれにさえ乗れば大通りまで戻れると思うが、まずそのバス停が見つからない。道路も見当たらない。ていうか建物すら見えない。

あ、言い忘れてたけど。

俺、今森の中だから。

「……もうツツコむ気力も起きねえよ」

見渡す限り木・木・木。日はあまり届かないし道らしいものもない。このままじゃ遭難確定の状況である。その上残念なことに、俺がこんなところに迷い込む原因になった諭吉さんはどこかの木の枝に引っかかったらしく見失ってしまった。くそう、一万円あれば工口本たくさん買えたのに！ 巨乳のお姉ちゃんのパフパフが見たかったのにっ！

え？ べつにそんな必死にならなくたってお前金持ちじゃないかって？



バカヤロウ！ 苦労して手に入れたエロ本だからこそ意味があるんじゃないかっ！ 親にもらった小遣いで買う？ ネットで注文？ 邪道邪道っ！ 貴様らは分かってない！ 分かっていない！ 本当の漢ならば、自分で稼いだ金でエロ本を購入するのだ！ なに？ 店員に本を見られるのが恥ずかしい？ 女性店員ならなおさら？ このボケナスどもがあ！ そんなもん堂々と趣味丸出しのエロ本差し出してついでにホテルにでも誘えばいいだけの話だろうが！ 自分の欲望も肯定できずに何がエロスか！ なに？ それはさすがに相手も引くだと？ これだけ言っても分からんのか貴様らはあ！ 歯を食いしばれ、今日は徹底的にしごくっ！ 貴様らがエロの何たるかを理解するまでは寝られないと思えーっ！ はいいいい指導指導指導おおおおっ！！

ぜえ……ぜえ……ん？ そもそも空飛ぶ諭吉は自分で稼いだ金ではないだと？

……………。

「さて、まずはこの森を抜けることを優先するか。時間が惜しい。急ごっ」

マイ脳内論争は無事平和的に帰着したので、俺はすったかと森を歩き出した。うん、まああれだ。漢なら新のエロ道を極めろって話ですよ。そういうことにしておこう、それがいい。

そんなこんなで歩き始めて、およそ30分。

「うーん」

まあ、最初から予想してたことだけどさ。

「……なんか変だな、この森」

変というか、まず存在からしておかしい。

確かにこの神楽坂学園の敷地は恐ろしいほど広い。30分歩きつめても出られないぐらいの森が存在することはできるだろう。だが、あくまでここは『学園』だ。いくらなんでもこれはないだろう。ものがわんさかある神楽坂だが、生徒が遭難する可能性のあるこんな森を敷地内になんの整備もなく置いておくとは考えにくい。しかもこの生徒は大半がひ弱な御曹司かお嬢様である。なおさらおかしい。一体何なんだよ、この森。

「くそ、せめて携帯が使えれば真奈美さん達に連絡を入れることができるんだがな……」

試しに携帯を開いてみるが、やはり圏外だ。自力で森から脱出するしかないらしい。

「と言っても、正直これはお手上げ侍なんだけどな……」

体力はまだ残ってるし、精神的にも落ち着いている。だが、日がほとんど遮られた道とも言えない道を一人で歩き続けるってもかなりしんどい。長居するのは得策じゃない……。

と、若干鬱が入り始めた頃になって、ようやく目の前が開けてきた。

「……なんだ、これ？」

やっと森を抜けたと思ったら、目の前には古びた建物がぽつんと立っていた。

よく見れば、それはどうやら古くなって打ち捨てられた廃校舎らしかった。サイズはいたって普通。おかしい。いや、おかしくないけどおかしい。この神楽坂にこんな普通サイズの校舎があるはずがない。たぶん、市を買い取った際にもともと建てられていたものだと思うけど、なんでわざわざ残してあるんだ？

「ま、そんなことはどうでもいい。それよりも……これはフラグじゃないか？」

こういついかにも怪しげな場所には何かしらのイベントが用意されているのが世界の常識である。例えばお化けが出たり地下への階段を発見したり巨乳ちゃんと出くわしたりボインがぱふぱふでパルプンテだったりぐへへへへ。

いやしかし、せっかく森を抜けたのだから、まずは携帯で連絡を取るべき……でもあの真奈美さんのことだからすぐ駆けつけちゃって探索してる暇とかなさそうだし……どうする俺？

2 行く！

3 行くっ！！

欲望に素直な俺に万歳。

「う〜〜、イベントイベント〜〜」

今、イベントを求めて全力疾走している俺は、お金持ち学校に通う予定のごく一般的な男の子。強いて違うところをあげるとすれば、ボインに興味があるってところかな。名前は朝霧才悟。

そんなわけで迷子の果てに見つけた怪しげな建物に來たのだ。

「！」

ふと見ると、廃れた教室の片隅に、チャイナ服を來た一人の美女

が立っていた。

ウホッ！ いい巨乳……。

ハッ。

そう思っていると、突然その美女は俺の前で魅惑の谷間を寄せてあげはじめたのだ……！

「肉まんお二ついかが？」

「テイクアアアアアアアアアアアウトッ！」

俺は己のリビドーが抑えられず無我夢中で二つの膨らみへと飛びついた……！

「肉まん最高

ッッッ！……！」

という夢を見たのだ。

「全俺が泣いた！ どうせこんなオチだと思ってたよちくしょうっ  
！！」

跳ね起きるとともにツツコむ俺。……跳ね起きる？

「ここは……いつっ」

状況を確認しようとしていきなり鋭い痛みが頭を襲った。同時に意識が鮮明になっていく。そうだ、確か俺は好奇心に突き動かされて、興奮のあまりスキップで校舎を探索していたら、古くなった床を踏み抜いて……。

見上げると、結構高いところに穴が開いていた。さすが俺、あんなところから落ちたというのに特に深刻な怪我が一つもない。ダテに借金取りと死闘をくりひろげたわけじゃないぜ！（リンチくらってただけってのは俺と君だけの秘密だ）

痛みを堪えながら立ち上がる。さっきまで探索していたのは二階だったからここは一階……のはずだが、さっき一階を回ったときにはこんな部屋なかったと思うんだけど……。

そこで、俺は初めてこの部屋に俺以外の人物がいることに気づいた。

「……」

ぜんぜん気づかなかった。それでも人の気配を察知するのは得意

なのに。修司さんの時も気づけなかったが、これはそんなレベルじゃない。

” 本当に、この部屋に最初からいたのだろうか？ ”

なんてのは正直どーでもいいことなんだが。

そんなことより！

薄暗い廃校舎の部屋の片隅、外から入るわずかな光に照らされた人物。その姿は間違いなく……

美少女キタ

ツツ！！

神よ……あなたは俺を見捨てなかったのですね。

いやー、何事もチャレンジしてみるもんだよな。まさかほんとにモノホンの美少女と出くわせるとは。まあね？ 予感があったわけですよ。なんかこう、朝起きた瞬間から、「あ、今日巨乳ちゃんと知り合いになれる」という絶対的な予感が！ というか確信が！

さっきの夢は正夢だったんだ！

そうだ俺の確信が外れるわけがない！

だってタイトルが『あれ』だもの！

「やっぱり肉まん最高

ッ  
ッッ！...！」

美少女の胸には、果てしない平原が広がっていた。

「

.....あるえー」

しばし、目を閉じる。

開ける。

つるーん。

効果音が聞こえそうなほど、やっぱりそこに男の夢は詰まっ



かった。

「……………あの、君、新キャラ？」

「…………？」

少女は首をかしげる。しばし逡巡した後、なんとなく意味を悟ったのか、少女はコクンと頷いた。

「ハイッー!!」

バキッ

「…………あれ？　なんでだろう？　思い切り顔を殴ったのに夢から覚めないよママン」

その時、ふと天からお告げが聞こえたような気がした。

『カレンダー、見てみな』

言われた通りに携帯のカレンダーに目を通した。

4月1日。

世間はそれを、エイプリルフルと呼ぶ。

「釣りか！？ 読者をも巻き込んだ盛大な嘘っぱちかコラ！？ 釣られてサーセン！」

この世に神は存在しない。

そんなことを深く痛感させられた俺だった。

「……………（ジー）」

「あ」

いかん、絶望のあまり新キャラちゃんをほったらかしにしまった。ていうか、まだいたのか君。普通あれだけの奇行を見れば逃げ出すと思うんだけど。自覚ぐらい俺にだってあるよバカヤロウ！

しかし、この新キャラちゃん、ずっとこっちを見ている。仲間にしてほしいのだろうか？ さっきからずっと喋らないし、内気な子なのかも。

いやしかし、冷静に考えると、これなんてギャルゲー状態だよな。それならここいらで選択肢とかが出てきそうだ。あ、ちょうど俺の頭にぼわぼわと選択肢が出てきた。

どれどれ。

1・犯す

2・やる

3・ナニをする

とんだ下種野郎だぜヒヤッホウ！

「……………」

あれ。なんか距離を開けられちゃったぞ。変だな、おかしい拳動はしてないつもりだが。

「……………そういう下品なこと考える人、嫌い」

……Oh。もしかして心読まれてますか俺？

ていうかやっと思ったなこの子。

「ねえ、もしかして俺の考えてることが分かるの？」

俺は努めて優しい声音を選びながら少女に尋ねる。目が合う。速攻でそらされた。素っ気ない。しょぼーん。

ふむ、答えないというのなら、ひとつ試してみるか。

~~~~~下ネタを回想中~~~~~

ズザザザザザザザッ      ものすごい速さで後ずさる音

「……………（じとー）」

やめて……そんな目でぼくを見ないで……。

「ぐすつ。心が読めるとか卑怯だ、プライバシーの侵害だあー。訴えてやるぞうえええん」

シヨツクのあまり幼児退行に突入した俺。まあブラフだけど。

「……………ぜんぶがぜんぶ見えるわけじゃない。普段は相手がどんな心理状態にあるかを知るのがせいぜい。でも、何故か邪な思いだけははっきり見えてしまう」

な、なんという思春期殺しの能力！　だがしかあしつ。本場イギリスに勝るとも劣らない絶対紳士であるこの俺がそう簡単に邪な思いにとらわれるとでも　　！

~~~~~うはうはハーレム妄想中~~~~~

「……………さようなら」

「すみません！　マジ冗談ですからそんな汚物を見るような目ではくを見ないでっ！」

サイゴはえっちなもうそうをふういんされた！

「ぐすつ。ひどい、ひどいよ神様。なんてキャラを投入しちゃったんだよねぐつ。俺からエロスを取ったら、紳士から変態を取ったら、一体何が残るって言うんだよねええええええん！」 マジ泣き

「……変な人」

新キャラちゃんは無情な一言で俺に止めを刺した。

もう……どうとでもしてくれ……。

俺は投げやり気味に壁際に座り込んだ。深い息をする。すると、思った以上に体が疲れていることに気づいた。はて、なんでこんなに疲れてるんだっけ？ 素でそんなことを数秒間考えて、やっと俺が迷子であることを思い出した。廃校舎への興味が強すぎてすっかり忘れていた。

一瞬、真奈美さんに連絡を取ろうと思ったが、結局やめた。別に深い意味はない。もうこの建物の目ばしい場所はあらかた回ってしまっただし、イベントらしきものにも遭遇できたので満足といえれば満足なのだが、なんとなく俺はもう少しこの不思議な少女と語らっていたかったのだ。

「なあ、君ってさあ、名前なんてーの？」

「……？」

「名前だよ名前。人なんだから名前ぐらいあるでしょ」

「……………」

「あの、無視ですか？ シカトですか？」

「……………」

「……おーけい。それは俺に対する挑戦と受け取っていいんだな？」

「？」

俺はちょうど近くに転がっていた白のチョークを手に取り、壁に文字を書き始めた。

「第一回！ 新キャラちゃんに素敵な名前をつけよう選手権！ はい拍手ー！」

「……それ、『第』一回じゃなくて、『策』一回になってる」

「……………ハッハッハ。モチロンジョウダンデスヨ？」

さて、では気を取り直して。

「万年寝太郎」

「……………え？」

「え？ じゃねえよ。万年寝太郎だよ。苗字が万年で寝太郎が名前。どうよこれ？」

「……わたし、そんなにいつも寝てないし、男の子でもない」

「なんだ気に入らなかったか。じゃあそうだな……麻生太郎なんてどうよ？」

「……わたし、政治なんてよく分からないし、アニメも漫画も知らないし、何より男の子じゃない」

「これもダメか。それじゃあ……あつ、浦島太郎とかぴったりじゃね？」

「……いい加減太郎から離れて」

「たく、注文の多いやつचनाあ。分かった分かった、そこまで言うなら、君には俺が子供を授かったときに与えようと思っていた名前、小便太郎を贈呈しようじゃないか。もってけドロボー！」

「……………」

「え、嘘？ これもダメなの？ おかしいな、俺の予想では小便の時点で喜びのあまり側方倒立回転でも始めるはずだったんだが……。うーむ、ここまで手ごわいとなると、やはり禁断の花子シリーズを持ち出すしか……」

「ゆう」

「ん？」

「……わたしの名前、ゆう」

「ほー。ゆう、か。いい名前だな。まあ小便太郎には遥かに劣るが。」

俺は朝霧才悟。漢字分かるか？ 朝の霧に、才を悟るって書くんだ」

「……バカにしてる？ それぐらい分かる」

「そうか？ お前、パツと見、中学あがりたてに見えるけど」

「……失敬な。わたし、あなたより年上」

「うそっ！？ 今何歳！？」

「268歳」

「はいはいあるあ      ねーよ！ リアル世界にロリババアが存在できる道理はチリ一つとして存在しません！」

「……そんなこと言われても。これ、変えようのない事実。不変の真理」

「……分かった。そこまで言うなら268歳ってことにしてやろう。じゃあこれから君の呼び名はババアな」

「え」

「これからよろしくね、ババア」

「……」

「うん？ どうしたんだいババア？」

「……」



「あれ？ 聞こえなかった？ ああそうか、ババアだもんね。声も聞き取りづらいよね。ごめんよババア。で、どうしたんだい？ ババア？」

「…………… 14歳で、いい」

「え？ よく聞こえないよババア」

「14歳！」

「うおっ！」

初めて聞いた少女の怒声に俺は飛び上がった。見ると、今まで感情に乏しかった表情に赤みが差している。どうやら思った以上にババアという呼び名が不名誉だったらしい。

「あーびつくらこいたあ。なんだ、ちゃんとでかい声も出せるんじゃないか。やっぱり子供は元気な声を出してる方がいいね、うんうん」

「……………」

沈黙してしまった。さすがにからかいすぎたかな。

こうなったら、密かに編み上げていた俺の処世術、”土下座から始まる信頼関係”を実行に移すしかないか

「……………どうして？」

突然、少女は口を開いた。まん丸とした目をまっすぐ俺へと向けて。

「……どうして、あなたはここを去らないの？」

「どうしてって、ゆうに興味があつたから。もっと話してみたかったから。……ひょっとして、迷惑だったか？」

ふるふる、と彼女は首を振った。

「……恐くないの？」

「恐いって、何が？」

「……わたし、人の心が読めるんだよ？」

「うん、それが？」

「……気持ち悪く、ないの？」

「べつに？」

「……わたしがうそついてるって、思わないの？」

「そりゃ、突拍子もなく『わたしい、実は人の心が読めちゃうんですっ、てへっ』とか言い出したら張り倒してるところだけど、実際にゆうは俺の心を読んだんだろ？俺は人から得た情報には常に疑心を抱いてるけど、自分の目で見た情報は信じることにしてるんだ」

「……変な人」

「失敬な。ここまで完璧なナイスガイなんて今時珍しいべ？」

「……訂正。サイゴはおもしろい人。くすっ」

ゆうは初めて俺に笑顔を向けた。それは笑顔というにはあまりに淡いものだったけど、俺の心はほんわかと温かくなった。

「……あ」

「どうした？」

「もう、帰らないと……」

「そうなのか」

携帯の時計を見ると、時刻はちょうど17時を指していた。意外に長い時間ここに居たらしい。

「……ねえ、サイゴ」

「ん？」

「……また、一緒に遊んでいい？」

「まあ、今みたいな感じでいいなら、いくらでも相手してやるけどさ、俺なんかと遊ぶより友達と遊んだ方がいいんじゃないのか？」

「……いい。サイゴがいい」

それに、とゆうは付け足した。

「……わたし達、もう友達」

「なるほど、こりゃ一本取られた。ははは」

「ふふ」

そうして、一つの微笑をもらした俺の新しい友達は、どこかへと去っていった。

「……ふう。これまた、変わった奴と知り合いになっちまったなあ」

でも、悪い子ではなさそうだ。不思議ちゃんではあるけど、おとなしいし、かわいいし。ぜひウチの麗菜とポジションチェンジしてもらいたい。

「さて、それじゃあ俺もみんなのところへ戻るかな」

もう一度俺は携帯を取り出してアドレス帳を引き出した。そこで真奈美さんの番号を見つけ出してコール。何回かコール音が鳴ってから、それが止まる。

「もしもし、真奈美さん？ 俺だよ俺俺。あ、オレオレ詐欺じゃないぞ？ にしてもよく一発で電話に出れたなあ真奈美さん。いっつも2、3回はミスらないとダメなのに。あれ？ 真奈美さん？  
もしもし、聞こえてる？」

おかしい。ぜんぜん返事を返してくれない。訝しく思って俺は画

面を見てみた。

バッテリー切れです。充電してください

「  
.....  
あるえー」

さて、質問するぞこの野郎。

この尋常でないほどの広さを持つ学園を、救助なしに徒歩で脱出できる可能性はいくら？

「.....ハツハツハ、おーけいおーけいなんにも問題ないあるヨー。とにかく誰かに会えればいいんだからちよろくしょーあるヨー」

イツポジティブシンキング。大丈夫！　だって僕はやればできる子だもの！

もちろん、俺が救助されたのはそれから7時間後のことでした。

もしも許されるならば、わたしは神を殴りたい。



## 第6話：新キャラは巨乳？　ずっと俺のターン！（後書き）

はいはい釣り乙。

いやー、一回やってみたかったんですよ、タイトル騙し。ホントはエイプリルフルネタとして4月1日に出す予定だったんですけど、見事に間に合いませんでした。もし作者がプロになったとしたら、速攻で首を切られるでしょうね。締め切り？　なにそれおいしいの？

さて、今回はまたずいぶんと間が空いてしまいましたが、今回の理由があるんです。一応作者は職業的には『高校生』という立場にいるわけで、今年はその高校生活でもっとも厳しいイベント　つまり受験があるわけです。そんなわけで最近は予備校と家を行き来してばかりで小説を書いてる時間がないんです。気力もわかないですし。

ということ、まことに勝手ながらしばらく小説の更新はストップということになりそうです。暇があつたら書いたりするかもしれませんが、せいぜい1、2話分ぐらいだと思います。本当に申し訳ありません。

それでは、また受験が終わったシーズンにでもお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8837e/>

---

キズナ！

2010年10月10日00時19分発行